川柳雜誌

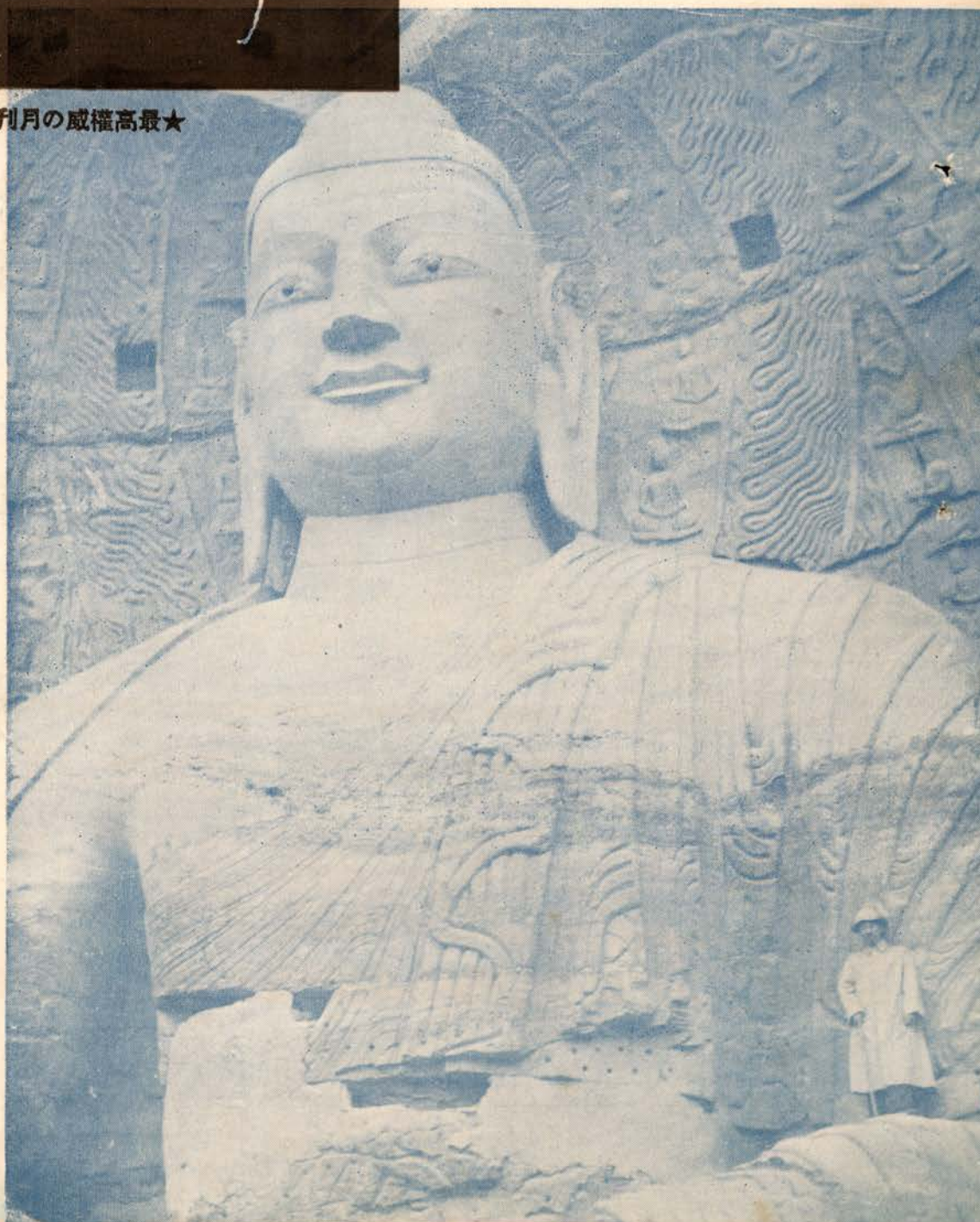
昭和十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和十四年十月十五日發行　第十六卷第十號（毎月一回十五日發行）

★兵士は戰線に！　我等は銃後に！！

Pesoi flugas trans la landolimon

麻生路郎★主宰

★最高權威の月刊柳誌・人生勉强の標識燈



189

第十六卷　第十號

毎月十五日發行

川柳雜誌 十一月の會

2日 夜6時（木）

★會場　誓得寺（電話南四八八六）
市電清水町電停一丁北ノ辻西入

★兼題　「ぬけ毛」（三句）……麻生路郎選
「大理石」（三句）……奥村丹路選
（前月句會の句中より）……水谷酔美

★講評題　未定……岡田某人

★柳話　三〇錢（川協章提示の方は二五錢）

★會費　天位（各題）に粗品を贈る

★呈賞　幹事・豆秋・潮花・八九滿・斗風・紫香・いわを・里十九

柳誌の誓文拂
欠本のため今本の出來ぬ方は是非お出掛け下さい。不用柳誌出品希望の方は前以て申込まれたい。

大阪市西區江戸堀上通二ノ四六（昭和ビル）
川柳雜誌社
電土佐堀三三三三・八一六三・八一六四番

謹告

今回榮えある御召を蒙り入隊致す事と相成男子の本懷不過之實に欣躍茲に從來の營業を一時閉鎖し專心軍務に淬勵邦家に盡すべき覺悟に御座候間御諒承被下度候　閉店に際し從來の御眷顧奉謝候　敬具

昭和十四年八月廿八日

大阪市南區鰻谷西之町
錦屋　西垣久彦

★戰線へ銃後へ笑爆へ快る送を著！

新川柳評釋

麻生路郎著

本書は本誌に連載され名評釋として好評嘖々たりし「川柳評釋百句」及び「川柳名句評釋」の二篇を合纂したるもの、評釋の輕妙さは日本柳壇に於ける著者の獨壇場である敢て薦む！

★四六上版紙質フラ縞一〇四頁
★定價八十錢　送料六錢
★地外他のそ　八十八錢

麻生路郎序・石井白面人編
川柳人の一代（縞版）賣切

麻生路郎著・柴谷柴舟漫畫
川柳漫畫累卵の遊び　特價八拾錢　送料九錢

麻生路郎序・阪大川柳會編纂
川柳句集大川端　頒價壹圓　送料九錢

麻生路郎序・橋本綠雨著
川柳句集街の雜音　定價五拾錢　送料六錢

「川柳雜誌」合本（菊版時代）一部壹圓半　送料卅錢

「川雜投句箋」一冊十五錢　二冊廿五錢

堺市出島町三五一番地
發行所　不朽洞
振替大阪三〇三九二番

★內外時事★

★日本帝國が列國にさきがけて滿洲國を承認してから七周年になる（九月十五日）
☆日ソ停戰協定成立（十六日）
★ワルソーの波蘭軍、獨軍の投降勸告最後通牒を受諾（十七日）
☆長期戰下の國民生活を安きに置く大礎石として物價停止令が十九日の閣議に於て決定された
★國民黨中央委員會主席汪兆銘氏は南京に於て臨時政府主班王克敏、維新政府主班梁鴻志兩氏と會談、新中央政府の基礎工作成る（廿日）
☆波蘭を獨ソで分割、ワルソーは獨領となる（廿二日）
★入試は明春から學科試驗を廢し口頭試問による人物考査、體力、小學校側からの內申の三つの方法によることとなつた、判定し難きは抽籤（廿二日）
☆棚橋絢子刀自死去、享年百一歲（廿一日）
★カリネスコ首相の暗殺されたルーマニヤ政府はアルゲセアノ將軍を後繼首相に任命した（廿一日）
☆洋畫壇の大御所、岡田三郎助畫伯死去享年七十一歲（廿三日）
★精神分析學の創始者ジクムンド・フロイド博士死去、享年八十三歲（廿三日）
☆外務大臣に野村吉三郎大將就任（廿五日）
★二府二十縣の府縣會議員投票（廿五日）
☆大阪堂島米穀取引所は米穀統制法により日本米穀株式會社の誕生と共に消へた（十月一日）
★元文相小橋一太氏逝去（十月二日）

大阪帝國大學醫學部教授・醫學博士　長崎秀氏

句の秋

不朽洞句抄

麻生路郎

秋の雲　街を外づれたバス小さし
デンテイスト　二階へ先にかけ上り
清貧へあんまりといふ里の母
菊正へ醫者と患者とうまがあひ
遠ひ棚會社が呉れた時計也
天壽の家に　樽の菊正
大臣の醉筆ここの一の宿

★★★川柳勇士の隨筆★★★★★★★

僕は大阪人

南支　市塲沒食子

☆豚

最一線から廣東へ所用で歸る途中、○○地附近でのこと、街道の兩側で遊んでゐた豚の中の一疋、十台以上のトラックに驚いて街道へ上つてしまつた。と同時に警笛にあはて丶前方へ〳〵と走つてしまつた。運轉手の兵隊が轢き殺ろせとばかりにスピードをかけたが、豚も命に關することとて走る〳〵、凡そ四○○米ほども追ひつ追はれつしたが遂に豚は横にそれて命拾ひをした。豚もなか〳〵よく走ると思つた。漢法醫書に豕豚痛と云ふ言葉がある。

☆犬

或る部落へ宣撫に行つた時、エネルギッシュな感じをうける村長が村民の治療をしてもらつた禮に赤の小犬を一疋呉れた。可愛いので歸つたら兵隊間の人氣者になつた。然しこの犬は愛玩用にくれたのではなくて食用に呉れたのだつた。面白いなアと思つた。四ヶ月ほども飼つて居たが今度の上陸策戰に連れて行く事が出來なかつたので捨てしまつた。今頃は野犬になつてゐるだらう。

☆髭

兵隊の誰れも彼れも髭を殘す。立派なのが多く、ヒットラー型、藤澤樟腦型、荒木大將型、チャップリン型等々。僕のより惡いのは一寸見當らない。君の髭なんか落してしまへと云ふ戰友が居る、十五年もの古い歷史を知らずして。

☆ビール

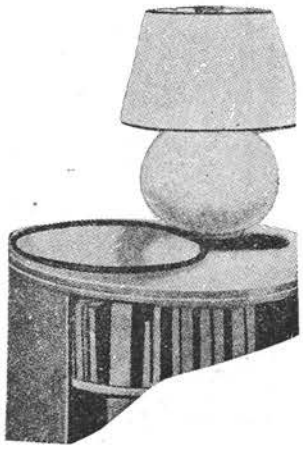
銃後はさぞビールが値上りしてビール黨を弱らしてゐる事だろ。戰地にゐるお蔭で朝日にしても、麒麟にしても二十五錢で呑める。只品切になるのが早いだけだ。今ウンと呑んでおこ。歸れば滅多にこんな安いビールは呑めんぞと、ビール黨の機嫌は良い、僕もそのうちのひとり。

☆蛇

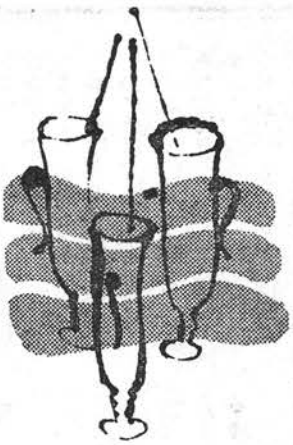
珍とするには足り無いが犬も蛙も注文して食つた。殘るは當地名物の蛇だ。料理屋へ出掛けるが田舍から持つて來ないのでプシンだと云ふ。其のうち機會があるだろ。話が食ふ方になつて來た。僕も大阪人だなアと微苦笑しながらペンを擱く。

（八月三十一日）

川柳雜誌　十月號　目次



表紙寫眞……（大同・石佛）……岩崎柳路
內外時事……（一）
武玉川三篇研究（三四）……森　東……（八）
僕は大阪人……市塲沒食子……（一）
子兎……安川久留美……（二）
上海便り……植山九天……（七）
漫畫陣中鏡……北　みきを……（五）
川柳解題と例句……路　郎編……（一〇）
道塲生活斷片……高尾亮雄……（一〇）
街に住めば……高橋かほる……（一一）
月評　川柳一ト筋……須崎村丹路……（一二）
病室手帖……蛭子省二……（一四）
演劇・映畫に川柳を觀る……姫田谷夕鐘美秋……（一五）
紀行句を見て……水邊曉童……（一一）
隨筆（電車其の他）……渡邊曉童……（一一）
釣……岡田某人……（七）
貝……丹波斗士……（七）
迷惑な連想……小山文三……（一〇）
路傍ッ戸時代……水野長零……（六）
★
近作柳樽……麻生路郎選……（一四）
川柳塔……麻生路郎選……（一三）
同舟近詠……諸生路郎……（一三）
不朽洞句抄……麻生路郎……（一）
一路集　寢猿豪車……福田山雨樓選……（一一）
高峰柳兒選……（一一）
各地柳壇……（六）
後記……（表三）
柳界展望……社關係の人々……（表三）
川・協……（五）
川雜案內……（四）



評月 川柳一ト筋

某人・鋭々・豆秋・鮎美・丹路・亞鈍・夕鐘・かほる・葭乃

丹路—亞鈍さん！ぢや始めませうか。今晩は新來のかほるさんから先づ提出して貰ひませう。

かほる—わてだつかいな。けふは聽かして貰ひまんねえ。

鮎美—いや、今晩の立役者ですからな。かほるさんから一つお願ひします。

かほる—どんなん、言はしてもろうてエのやら、解らしまへんがなアー。

葭乃—アンタの氣に入つたん、言ひはつたら宜ろしいんね

（こゝもとかほるの大阪辯につられたかたち）

かほる提出＝近作柳樽

待つてゐるマイクロフオンが咳をする　飯尾寄與史

かほる—（無言）

丹路—この句で何か御意見ありませんか。

鮎美—かほるさん、何か提出した理由を言ひはつたら……。亞鈍さんが速記しますから。

かほる—わて、これ、好きだア。そない書いといとくんなはれ。（笑聲）

鮎美—なあるほどな——。

亞鈍—（某人の方へ向ひ）おい。何か言へよ。

某人—これはこれで通るけれど、本當はマイクロフオンでなしにスピーカーですな。

丹路—受信機の方？

某人—待つてゐる、とあるから聽いてる方だが、スピーカーの咳を機械が咳をするといふのでこの句に柳味を感じる。

葭乃—凝人法でせう。

鋭々—咳をしたといふところでマイクが特に浮びますネ。

丹路—つまりこの句は待つてゐるマイクでなしに、待つてゐるとマイクロフオンが咳をする。ですね。その遍の敍法にひつかゝる。

（一一、三同感の意思表示あり）

鋭々—散文で書けば、さういふことになりますね。

葭乃—しかし無理なことはないですネ。

豆秋提出＝近作柳樽

そんなん氣にしなと溫度表をとり　西尾　栞

豆秋—これ、患者が不吉な夢みたか、何んかで、先生が廻つて來た時に、先生に告げたら、先生が溫度表を採つて、そんなに氣にしな、と言つたといふ句意です。それで、先生と患者との溫かみを、そんなんといふ俗語で表現して効果的だと思ひます。

某人—僕は、これ、先生といふより極く親しい友達が言つてゐるやうな氣がするんですけれど……。又このとるといふのは、患者の持つてゐる溫度表をとるといふのと、ぶら下つてゐるのをとるといふのと二通りに採れる。

鋭々—これは私は、マア友人だらうと思ひますな。それや勿論大阪の先生だから大阪の言葉を使ふでせうが、先生にしても友人か何んか、そんな意味あひの方が適當してゐると思ひますな。

夕鐘—これは、やはり友人が見舞に行つて溫度表をとり上げたと解しますな。

豆秋—作者が阪大川柳會の方なのでそれが禍ひしたんですね。まあ、これや、やつぱり友達やな。

鮎美—まあ、友愛關係の濃いところですな。こゝで、太陽の陽が、病室に直射してゐると想像したらこの句の雰圍氣が出てくると思ひますね。一方は焦慮してゐるし、一方は打消してゐるところへ陽の光りを入れると非常に佳いと思ひますけれど。

鋭々提出＝近作柳樽

お隣へ片手ない子が越して來て　小宮山雅登

鋭々—この句は極く平々坦々とした句ですが、隣りの子に對する同情と自分の家の子と比較して自分の子の幸せであるといふ事を感じたのをごく客觀的に表れてゐる處が良いと思ふ。何かこの他にもう少し事柄を入れて言ひたいところでせうが、先づこれでも餘韻があつて十二分とは言へませんが、出來てゐる句だと思ひます。何か隣の子を見た時に胸迫るやうな感じが想像されはしませんか。

鮎美—さうですね。よく句會の席題なんかで、吃りの子や啞の子など淋しみをもつ句が出て私などもよく作りましたが、片手のない句は今までやつてみた事がない。それ丈この句は眞に迫つてゐる太い感傷の句であつて、皆さんと一緒にこの句からくる感じを突き進んで、席題としてでなしに、研究すれば我々の前に開けるところの新しい境地にまで到達するのではないかと思はれます。皆さんどうですか？

豆秋—越して來ての二つてが重つてありますが、少しも耳ざわりにならず、餘韻、餘情が表れて非常に良いと思ひます。

丹路—下五にテが二つありますね。（笑聲）

某人—埋め合せてあるのや。（笑聲）

鮎美—實際、私達は片手をとられても川柳を續けて行きたいと思ひますね。それだけの精進する意志は私にもあると思ひます。

某人—結局、この句のもつてゐる餘情といふものは、さつき鋭々さんの言はれたやうに客觀してあるところに餘情が出て來てゐるんだと思ふ。而もこれが越して來たとなると、どうにもしやうのない句になるが、來てで客觀の背後にある主觀が窺はれる。そこらにこの句に惹かれる鋭々さんの氣持がわかる。それと、鋭々さんの仰言つた何か一つ言ひたい事がある、といつたそういふ事もこの句が客觀で突き離したかたちになつてゐるからで、それを逆に突込めば今までにあるやうな說明され過ぎた露骨なものに慣れきつてゐるさういふ句でないと物足りないさういつたものに疎々さんの危惧が原因されてゐるんぢやないか……。

鋭々—要するに平凡に表現されてゐて、いろんな客觀的な主觀を思はす句ですな——これは……。

某人—さうです。簡單に言ふとこの句は作つた句でなしに出來た句。しかも出來ただけで拋つて置かないで、ちやんとしまつをつけ旅立せた句だと思ふんです。

鋭々—さうですな。

丹路—大體意見が一致しましたね。では夕鐘さんに。

夕鐘提出＝近作柳樽

三度程下湯を買はずはまだ買へず　吉田　文女

夕鐘—句の價値としては上位のものではないかも知れませんが、市場を通して男の氣付かぬ氣遣ひがよく出てゐると思ひます。

丹路—その次の句「とうふ屋のラッパ時報のやうに來る」も面白いですな。名古屋はラッパを吹いてくるんですなア。

（註、大阪は鈴を振る）

葭乃—東京もラッパでせう。

夕鐘—大掃除の時に吹いてくるあんなラッパでせう。

鮎美—これは下五の買へずで女中さんでなしに奥さんといふ事がよくわかりますね。女中さんだつたら一遍で買つてしまひますネ（笑聲）買ふまでの妻のデリケートな氣持がよく出てゐますよ。

豆秋—市場を三度、かうして廻るといふのは一種、女の愉しみ——享樂？するんぢやないですか。（笑聲）

夕鐘—そんな悠長な感じがこの句に出てゐない。

丹路—まだ買へずで、それが解りますね。

豆秋—鮎美さんの句に「まづいまづいと亭主みんな喰ひ」がありますが、まづい〳〵と言はれんやうにね。

夕鐘—確に女にこんな苦勞があります。

鮎美—女てこれで生きてるんですからな。（笑聲）

丹路—御主人の水車さんの御仕込みですな。

夕鐘—女中を四五人使つて何のくつたくもない奥さんから聞いたことですが、女中から毎日のオカズを訊かれるのが一番辛いつてね、そんな事を聞いてゐたので此句がピンときたんです

豆秋—オカズは女の毎日の創作ですな。

葭乃提出＝川柳塔

A 女拔け道あり生理作用といふ

B ヨツト走る紺青の水ある限り

寺井鋭々

葭乃—鋭々さんのAの句は句主の理智に訴へた句、マア從つて川柳味が多分にあります。どういふところに川柳味を感じるかと言ひますと假に女が万引しても、あの人はあゝいふ人だといふのでなしに、それは月經期であつたからだといふやうな同情的な見方から、慾望が旺盛な爲に犯した罪は棚へ上げられる。まことに重寶であると多少揶揄つたところに川柳味を感ずるのだと思ひます。この句に較べて一番柳味が薄いだらうと思はれる句はBの句で、これを讀みますと、ヨツトが廣々とした海を走る樣が、彷彿として目に浮ぶ自然をスケツチしたといふ强さを非常に强く感じるだけに人間臭さが少いと思ひます。今「尼さんを寂しがらせる曼珠沙華」この句もやつぱり曼珠沙華を自然を讀んでゐるが、尼さんに寄せて氣持がこの句に盛られてゐます。しかしそれ丈に前のヨツト走る句から較べますと非常に部分的になつてゐますヨツト走る句の方が尼さんを寂しがせる句よりも場面も非常に廣いですが、大體斯ういふ風に自然を讀むのは川柳では非常に六ケしいと思ひます。私らが吟行に出て吟行の句が非常に六ヶしいわけは自然の大きさに打ち負かされて了つて、その人自身が持つてゐる內面的なものが——心が——盛り込まれなくなるのぢやないかと思ひます。(鋭々の方へ)なんど反駁おまへんか。

鋭々—いや、聽かして貰つて結構です。

鮎美—Aの句は都會の女の心を穿つた客觀の主觀ですね。

夕鐘—生理作用で、すぐ理窟が出ますね。

豆秋—固うなり勝ちな知性の句であり乍ら川柳味が脈打つてゐると、思ひます。

某人—僕の注文を言はして貰ひますと、情味に於て缺けるところがありはせんかと思ふんです。これ丈の荒々しさといふものに對しては肯けない事はないですが出來得べくんば少しどこかに情味を加へて、餘り知的すぎる點をゆるめると、もつと面白い句になるんぢやないかといふ氣がするんですが。先の葭乃さんの言葉を多少借りると、Aの句が玄米で、Bの句が重湯のやうな感じがするのです。滋養があつても消化に惡いし、腹にたまらない。その間のふつくらした御飯が望ましいんですが。

葭乃—このAの句ですね。情味のないのがこの句の取柄ぢやありません？

某人—その意味は判るんですが、たゞそれ丈では句といふよりも言葉だと思ひますね。句と言葉の違ひといふ事になると多少考へる必要があると思ふんですけれどね。

葭乃—言ひ現し方ですの？

某人—それもある。表現が固いのと、着想が十人のうち、八九人までが斯ういふ事は考へられてゐる。それ丈に句よりも言葉に近い氣がする。

葭乃—眼鏡の合し方で、さうとれんとも限りませんね。

夕鐘—この場合、ぶつきら棒に言つてるが、これで可いんだと思ひますね。

丹路—大分六ケしくなつて來たな。たゞそれ丈で思想も何も表れてゐないといふ……。

葭乃—ある意味での思想がありますネエ。

某人—古いといふ氣がしませんか。

丹路—鋭々さんはこの句が誌面に拔けたに對して、僕の臆測かも知れませんが、或ひは迷惑を感じてゐられませんか。何かあるやうな氣がする……。

某人—それは斯うでせう。此句が、こゝに載つたので、ある意味があるといふんでせう。

丹路—何かあるとすれば、女拔け道に何かあるんですな。

鋭々—結局、女といふものは斯ういふものだ。といふんですそれはしかし何か一つの事があつて、それを演繹して女といふものとは、と出たんですな。

葭乃—一つの事件から生み出された女の概念ですネ。

某人—これは一般論になりますが、非常に理窟つぽいものと情味のものとの、この二つのものゝ格闘になる思ひますな。今後の川柳は。

亞鈍—(葭乃に向つて)これ、川柳ですか、一寸僕考へさせられるんですけどね。僕は、これは川柳の素材をその儘拋げ出したものぢやないかと思ふ。川柳はこれを素材にして川柳的に切り盛りするのと違ひますか、

葭乃—つまり、概念でなく具體的な場面を取上げといふ意味？

亞鈍—この生理作用といふ言葉が生すぎると思ふんです。或ひは作者の教養の過剩ぢやないかと……。それに何か出來そこないの修身の中にある文句みたいでせう。(失言多謝——亞鈍——)

葭乃—格言のやうなものと言ふの。

某人—しかし、句と名のるには一脈何かなければならない。突つ離すにしても、何かそこに連なるものがなければ材木を置いてあるやうな句になる。

某人提出＝川柳塔

身づくろふせむしの春をさみしがり

大西八歩

某人—遺瀨なさといふものをこの句から感じられて好きになれさうな句なんです。ところが下五のさみしがり、が僕にはもう一つ具合が惡い氣がするんです。「身づくろふせむしの春」それ丈で遺瀨なさも寂しさも理るんぢやないかしら。身づくろひをやつてゐる本人の寂しさ、側でみてゐる人の氣持、何れも出てくるやうに思ふ。それを、さみしがりとして感情を露骨にして此句を弱くしてゐる。それから、果してさみしがつてゐるのは見てゐる方か、せむしの方か混亂を起すと思ふんです。こゝで考へさせられるのは淋しいとか、哀しいとか、さういふ生な感傷をそのまゝ句の中に表はすといふのが非常に安易に行はれてはゐないかと思はれるんです成程。情緒といふ點は必要ですが、句自體としては露骨な感情は出來る丈、避ける方が可いんぢやないかと思ひます。

豆秋—某人さんが今仰言つたやうに、下五を除つても强く出ますが、これをいとしがりとすると、こゝに母といふのが對象されてくると思ひます。八歩さんの句には、淋しいとか、哀しいとかいふ生の言葉がよく出ますが……。

鮎美—勿論季節的な春ではなしに年頃の春ですが、稍々弱められますが、下五のさみしがりもあつて、この句はある一面からは宜いのかと思はれます。

某人—これや然し、季節の春だと思ひますが。

かほる—さうでんな。これ季節の春でんな、えらい鮎美さんにすんまへんけどな。(笑聲)

鮎美—私、始めは季節の春と思つたんですが、どうも年頃の春と受けたいんです。

かほる—さうだつけど、そうしたら、感じが、きたのうなれしまへんか。

葭乃—季節の春と採つても、年頃の春が、仄かに出ませんか

鮎美—私自身としては、春を年頃と解するところに、この句の下五のさみしがりが、やはり可いんぢやないかと思ひます。

某人—ですと、鮎美さんの解釋では、さみしがりはどちらです？

鮎美—私は全體が、そうなんです。

某人—へつ——。

(某人、その意味わからず)

葭乃—セムシ自身も第三者もといふ意味でせう。

某人—しかし、どうしても僕には季節の春しか受けとれないですね。身づくろうは鮎美さんは勿論惹かれてはゐないでせうが、身の廻りを整へる、飾るといつたやうなものでなしに、ほんの一寸した動作だと思ふんですが。

丹路—季節の春としたら必然性がないのと違ひますか、秋でも可いのと。

某人—僕は春で可いのだと思ひますね。

鮎美—春を年頃にひゞかせたいんです。

丹路—鮎美さんの解釋は、やつぱり鮎美さんらしい。

鋭々—身づくろうで年頃が出てるとすれば春で重なりはしませんか。

某人—僕はたゞ、さみしがりを全然使つてはいけないといふのでなしに、說明になつてゐるのが、いけないのだ。

夕鐘—よく讀んでみると何か作爲があるやうに思ひますね。

某人—作爲にしてもよいものを見付けてゐる。

亞鈍—某人氏の句評は句を高く引上げやうとしてゐるし、鮎美氏のは、句主の氣持にまで引下げて批評してゐるといふことになるね。

葭乃—結局、結論はそこになりますわね。

丹路—ぢやこれ位ひで筆記拔きの雜談にしませう。

(亞鈍筆記)

名物とんかつ
揚ぢ北弓ル
電北 六五
六九 七四
五八 番

近作柳樽

麻生路郎選

婦人論分る女に親しめず　今治　長野文庫　同
鉢卷のまゝで塙團右門買ふ　同
女同志口繪の顏へケチをつけ　同
遲々として讀書進まぬ汽車の窓　同
文學女給小說好きの程度なり　同
劃數を爭つた末大字典　同
經本の他は用事のない隱居　同
名士夫人變體假名のやうな聲　同
恩給は栽培法の通りにす　同
憂鬱な男に凄い讀書力　同
角帽を脫いでキングを耽讀す　同
油繪の下に裝飾用洋書　同
やはらかい爪が淋しい奉公日　大阪　戶田孤逢　同
雨乞ひの雨はこまかく降りはじめ　同
山の宿まだ〳〵ついてくるラヂオ　同
油じむ算盤玉とわがいのち　同
十人目おなかにもつてゐる夫人　同
動物園姙んだ人間も來る　同
動物園人の子猿の子あひるの子　同
朝十時もう迷ひ子が一人出來　同
兒を抱けば妻のかひなの太くみえ　同
今日も亦死亡廣告みてしまひ　同
鶴嘴がぐつと處女地へつゝ立つた　同
それシヤツだバンツだ坊ンま雨に逢ひ　大阪府高石町　米本貴志子　同
裁ちそこね胸をだいたり合せたり　同
もぢかしい心にさゝる雲の峯　同
別莊で鳴けば蟋蟀うたにされ　同
橋詰へ軍公用を貼りならべ　同
はねつるべ大空までは屆きかね　同
青空を背負ふて柿が一つ熟れ　同

防共異變

背に腹か替へず醜女と緣を組み　同

小林一三氏對役者のつぶし云々の論爭へ

召されたる兵はつぶしの格でなし　同
舞台ほどにらみがきかぬ浮世なり　同
恙なく申譯なく二女產る　京都　伊藤入仙　同
新開地稽古ラッパに黃昏れる　同
芳紀十九苦勞も知らずお茶を點て　同
さればとて日本髮にも結はされず　同
召されてる夫にかびた登山靴　同
外人を夫に持つて猫と居る　同
たまに居る夫に宵の氣をつかひ　同

弟・歸還

夢でなく銃を握つて歸つて來　同

歩哨

歩哨線墨繪の樣に明けてくる　雨支　酒井美知夫　同
小孩へ歩哨我子を思ひ出し　同
銃抱いて歩哨は釋迦に似た姿　同
復哨の親子に似たる齡で立ち　同
炎天の歩哨任務があるばかり　同
雷鳴へ歩哨の姿神々し　同
虫聞いて歩哨は露に濡れてくる　同
監視哨双眼鏡に疲れ切る　同
てつかぶと抱いて機上の人となる　海拉爾　小川靜觀堂　同
唯指呼すオボあり低う秋を飛ぶ　同
草原に影を落して唯一機　同

病室手帖

蛭子省二

歐洲戰亂の爲に、ベルギーで催される國際人形展も中止となり、わが出品は高島屋での陳列により、川柳家は眼福を得られたであらうことを欽羨する。私は寫眞にて知るのであるが、臨風博士藏せらるる「大楠公」（森川杜園作）などの氣骨氣魄は、到底外國人に了解し得られなくはなからうか。よし傑出する雅趣は判るにしても、楠公の大精神が血液となつて居る日本人の感激同樣のものを享ける事は、到底思ひ及ばぬ。人形は單に人形としてのみ鑑賞する丈けでは足りない。聞けば「杜園は氣概ある名工で如何なる貴人に對しても自分の威嚴を損ずる樣な態度を見せなかつたと云ふ點で色々の逸話が殘つてゐる」と。奈良人形代表作の一つなりと云ふ。

外國人が雛人形を見物して、「ビューチフル」と賞讃するは當然であるが、雛とわが生活の傳統性を考察しないならば、脈動する生命に觸れ得ないのを陳べた事がある。川柳家にして雛專門作者たる竹田花川洞氏は、眞摯な藝術を頒布する會（百貨店等により）を行つて居らるゝが、工匠氣質から自己宣傳をされぬ爲に、川柳壇が後援した話を餘り耳にせぬ。この尊い仲間を遇するの道を缺くものと言ひたい。君は數年前から餘技として、京都木戶達磨堂秘藏古今の作五十點（達磨）を縮作し、奉仕的に手間代もない貳拾圓で提供されつゝあり、興亞の聖戰を續けて居る時局柄、興亞の達磨の緣起と藝術趣味に浸しむのは自力更生的國民精神作興强化へのお手本ともなる。

木戶忠太郎先生（前內相の伯父君）の御蒐集に就ては、恥づべきであるが、今迄全く何にも知らなかつたのである。「小達磨集」（堂主著）なる册子を花川洞氏から借覽味讀するに、『昭和七年旣集の達磨を總動員して新たに「達磨と其諸相」なる一册を建設して以來早くも六年を過ぎた。……陳列の目的で建てた十五坪半の達磨堂は限りなき增加を限りある面積に收容する事がなか〳〵困難になつて來た……分類だけにも相當の苦心が要る上に……新蒐集品との置換に……苦勞は並大抵でない……現堂主亡き後どうなるか……繼承を子孫又は他人に强ひることは出來ない、離合集散は浮世の習ひ』と、趣味的に學究的に、然かも達磨禪的に、總ての蒐集家への教導文字が四十頁に亘る。之蒐集家のみがもつ苦心即快心である。私も姓に因み、エビス蒐集を勸められた事は度々あつて、時に心も動いたのであるが工環境が添はぬ。病軀では手や足が働かぬ。マメである事が第一條件だからだ。エビスさんも各家庭に入り込むでは居る

地平また地平あり秋めきて　同

秋草に添へて

ノモンハンに咲いたいのちと思召せ　同

コロンバイル草原

天と草とそして仔馬が走つてる　同

うしろ姿を車掌もしばし見て居たり　松山芝田靈子

女二三人寄つて通じのない話　同

可能性有りと見られて所得税　同

留守の戸を叩けば山羊に笑はれる　同

歸省した姉の帶の値着物の値　同

そう云ふ事にしても幹事は腰をあげ　同

敎養は親に逆ふ事ばかり　名古屋清見松夢

電髮も吾が子がすれば悪くなし　同

反抗をして存在を知らせる氣　同

良く喋べる妻だと思ふ妻の留守　同

家計簿の苦心がふえる子が生れ　同

出戻りの姉の注意がくどすぎる　同

歸郷

母と居れば母は默つてるばかり　松山宮内耕朗

赤裸日本男子の肩の巾　同

當然の如く日本の強さなり　同

曉童君長男出生

産聲は男の聲だ勝いくさ　同

清貧の寢る倖をふと思ふ　同

い、夢が醒めりや働く身なりけり　大阪宮岡巨人

いやノ〜をせよといやノ〜して見せる　同

上役に反抗其の後に來たるもの　同

金策は電車賃だけ損になり　同

頼まれて心にもない嘘をつき　同

呼びに來た兒が助言の負將棋　大阪米谷松太樓

群衆を押し分けかき分け出る身内　同

全快をして故郷の美しき　同

親友山口君出征

その覺悟眼鏡の曇り拭いて征き　同

年甲斐もなく喫茶店の隅にゐる　同

御芳名へこそばゆくゐるイロハ順　今治石手向上庵

先づ何か食ふもの呉れと捕虜になり　同

先代の功をみとめた肖像畫　同

逆境を床のだるまに凝視され　同

羨めば内輪を話し否定する　同

待たされた灯で入と書く集金簿　大阪古寺謙南坊

ベル押せば隣へひゞく借家なり　同

新世帶國旗が雨にぬれた儘　同

このまゝで別れとむない告知板　同

泣虫も嫁に行く日が近くなり　同

親兎仔兎秋の山丸し　名古屋鈴木可香

シャンプーへ少なくなつた毛を握り　同

尼僧まだ若し垣根の花を剪り　同

黒雲を突き拔けてゆく獻納機　同

地所持つて都市計畫に迷はされ　同

工場の景氣小僧の氣が動き　京都福田丁路

停年へ今日を限りの廻り椅子　同

人間の家が餘りに脆く燃え　同

曉を衝いて産婆へまつしぐら　同

患らうてさてさて金の有難し　同

看護婦の白衣見飽いて未だ寢てる　岡山鈴木九坡

鐵橋を見に又行ける秋が來た　同

この頃は自肅型よと鏡出し　同

あの頃の涙のあとや酒のあと　同

そろばんの出來ぬ言譯ゆびを見る　同

停年に事勿れ主義目立つなり　長野高峰柳兒

吉報もなく愛の巣は行詰り　同

派手な人生觀を妓に敎へられ　同

殘業の疲れが響く板草履　同

ボタン皆はづして大きい話する　西宮阿萬々的

知らぬ街みんなこちらを見つめてる　同

煙草もみ消して乘氣になつた聲　同

定期券一人で乘れば眼をつむり　同

出征を送つた足でニュース館　奈良縣磯田町嶋田翠峰

かつちりと儲けた顏はすまし込み　同

唇を嚙む癖親の氣に入らず　同

名を立て、腦溢血を怖れたり　同

笑ひ方まで華やかな適齡期　大阪平川久枝

仲人は飲まぬと言つたはずだのに　同

小遣ひ帳みつ豆ばかりよく並び　同

おみくぢを妓拜んで開いて見　同

諦めた音にもあてる聽診器　愛媛縣大洲町澤松巽天樓

純潔の胸へ兵古帶堅くしめ　同

少女工働く愚痴を窓に捨て　同

が、達磨とは競ふべくもなく、拙家でも集むれば直に十點以上とならう。目本一となるッライ哉だ。

冊子には「達磨大師の忌日と誕生日」、「達磨大師の行方」、「最古い日本畫の達磨像」、「傳說より見たる達磨の目玉」から達磨の顏、手足、腹と尻、臍と尻の穴、皮肉と骨髓等が各項目に解剖し堅說横說。固ッ苦しい討究は次ぎの機會として、今「嬉遊笑覽」をみると、『詠物詩選雜玩部に呉偉業戲咏不倒翁詩あり是もとより達磨の像にはあらぬを、いつの程より達磨に作りたるか達磨を翫物とするも近き事には非らず、小兒の戲ごとに一に二にふんたる、だるまが赤い頭巾かぶりふんまいたといへり』とある。‖（蛭子註、フンタルはムの訛り。これを援用した古川柳に、『ふんだんでないは達磨も血にまみれ。』細川家血達磨の軸一件。）‖起上り小法師が達磨となつたのは江戸時代の事。而てそれらを小供玩具、趣味品、緣起物に大別し得られ、「棚のダルマ」といふ言葉が、何人の頭にも浮んでくる。堂主說に因れば、座禪姿では佛臭くて神棚にむかぬ處から起上りとなり、嘉永年間には「棚の達磨」の端唄は廣く唱はれて居るから、其以前に神樣の仲間入りをしたもの即ち疱瘡患者への見舞品となつて、疫神病魔退治の役目により緣起神と成つたのだと。疱瘡患者には總て赤いものづくめなるを要し、社壇を設けて赤い紙燭、赤紙の幣束から赤い頭巾、赤い着物を用いた。『輕いのは達磨のやうに抱いてくる』の句があり、これは明和代の作だ。疱瘡神送りにはダルマは燒き棄てられるか、川に流される又起上り製產の供給上、一年交替にされたりして、遂に「棚から落ちたダルマ」の諺さへ生れるに到つた。

正月は緣起を喜ぶ。關東では神社佛閣參詣の途すがら土產物屋で目無シ達磨を買ひ棚に祭上げ、吉事により開眼する。『大阪の西の方では、膳の上に達磨を載せて雜煮を祝ふと年中風邪を引かぬと云ひ、高松でも正月達磨を神棚に祀れば、首が下らぬ即ち病氣で臥ずに濟むと云ふ。さうかと思ふと博多では正月は名古屋製鉢卷達磨を決して買はない。これは新年早々頭痛鉢卷は緣起が悪いと御幣を擔ぐからである。……之れに反して熊本では初買に達磨を初棚に祀れば既婚者に必ず子供が生れると云ひ、鹿兒島では起きのよい達磨を買ひ當てると早起の嫁が貰へると云つて緣起を祝ふさうである。』（小達磨集と）。

然らばダルマには手も足もなかつたかといふに「達磨踊」が證明する。禪堂で達磨踊を踊り

年頃は煙草吹かして見たいだけ　同
大時計不良の札がまだ取れず　兵庫縣　北川春巣
氣の弱い車掌煙草へあつち向き　同
將校の何か大きく笑ひ合ひ　同

嚴島神社參詣

半凶のみくぢを鹿が食べてくれ　同
落選の憂目に知つた煙脂の味　下關　櫻川不水
妾宅へ目爽を拭いて出かけたり　同
洟水や統制力はなかりけり　同

西部戰線

竹光のそれでも見得を切つて拔き　同
診察へ婦人科男だけ殘り　愛媛縣大洲町　米澤曉明
バスガールこれから節になる瞳　同
寫眞師がこゝにもゐます太鼓橋　同
上陸へ女は女らしくなり　同
棧橋へ一家開拓の荷を置いて　朝鮮　弘津柳慶
卒業名簿これも肺病で死んだのか　同
ABCはかなく消えてアイウエオ　同
外交の裏の裏行くコンミュニケ　同
天國も統制雨を降らしめず　朝鮮　姜弘龍
非凡なり家出失戀そして妓に　同
口重し何時征き何時に歸つたやら　同
仲居でも吾れに負けぬか八級俸　同
甘諸秤不意に娘の帶をかけ　豊中　阿部閑生
慨然と立ち去る肩を蜻蛉追ひ　同
バナナ、食ふとこを寫した軍事便　同
讀み乍ら老眼かけん寢てしまい　兵庫縣　戸倉普天
長男に貰へば濟むが緣遠く　同
拾圓でとつてくれろと月給日　同
戰線へ報せたくない旱りなり　廣島縣竹原町　西野みづほ
病人の淋しく眺める募集欄　同
募集欄旋盤工が巾を取り　同
灯の消えた心齋橋を犬がゆく　大阪　松枝靜波
旱魃は云うてやらずに銃後無事　同
要領の良さを褒めたりくさしたり　同
爭ふこゝろ矢張り人間なるを知り　堺　麻生アート
雜音を逃れて行くか靈柩車　同
落着かぬ心桔梗と對座する　同
負け將棋白衣の袖を捲り上げ　福岡　大西洋

兵隊の戀は戰地へ行く日迄　同
看護婦に甘えて見たい勇士なり　大阪　西田白雨
子のヤンチヤス・フであらうがなか　同
らうが　同
號外はいがんだまゝで配ばられる　同
貧乏でひまのないのを羨まれ　同
貸した物ようもらはずに出征し　大阪　夷一笑
軍務公用橋筋に見る親不孝　同

日ソ停戰協定成立

停戰のそれから先がはかどらず　同
名曲演奏僕は見に來た　廣島　近藤須彌浩
猛然と湧く闘爭心を靜脈に　同
驛辨につとめあうてる義理の仲　同
けちんぼを輕蔑出來ぬ年になり　廣島　石川伯峰
君空は蒼いよ悲觀し給ふな　同
故郷を持たぬあはれさ官吏の子　同
ほころびた心へ秋のするどすぎ　大阪　森本秋子
母の客また緣談のことにふれ　同
寶塚倖せそうな娘と向ひ　同
軍事便父腹からの聲で讀み　東京　田中清風
女教員艶聞もない後ろつき　同
孝行は五頁してる立志傳　同
任せては呉れず仲裁もてあまし　名古屋　長谷川長樂
通譯の指さす富士は雲に入る　同
植木屋の鋏へ空は丸く晴れ　同
肉體美褒て其の他にふれぬなり　堺　野島神樂
不平丈けならべ仕事は嫌ひなり　同
藝術に秀で社交に遠ざかる　同

内地行軍

鶏を見れば徵發したくなり　岡山　大森喜八
砲彈の來ぬ行軍はよく疲れ　同

外出

喫茶の灯大陸灼けを見逃さず　同
御用聞き今日は譽の赤襷　大連　松井物數寄
警防團みんな若い氣卷脚絆　同
この嵐主婦は野菜の値を恐れ　同
簞笥未だ女の慾を入れ切れず　愛媛縣大洲町　武田京司
聖戰ぞたゞたゞ神を信ずべし　同
商才は人情なぞにこだわらず　同

始めたのは……其起原に就ては確な手掛りがない。たゞ諺に「どこぞの達磨の緣の下」と云ふのがこの達磨踊と關係あり、それが寛政時代には已に民間に行はれて居たのであるから、晩くも天明頃には禪僧達の手振首振面白く見られたことであらう。

この達磨踊は毎年冬夜（冬至の日）臨濟宗の寺で役僧雲水一同集まり酒宴を催ほすときに踊る番組の一つである。席上その寺の住職は赤い衣を着て後向に立ち、雲水等が、「達磨さんこちら向かんせ……」と唱ひ出すにつれ、正面に向き直り、「世の中は月雪花……」と歌に合はせて踊り出すのである……今井福山老師の御話では、明治十年西南戰爭後の祝賀會の盛に行はれた頃にはまだ殘つて居たが、寺院にても何時となく廢れ、今はたゞ欣食たけに止まつて居るそうである。維新頃までは毎年十月五日乞食社會にも達磨祭が行はれたものだが、その日は右に述べた達磨踊の形を十二段に籠で作り土を塗りて彩色したのか、又は緋金巾を同樣に貼つた人形を竹竿の先に挿したのを手に〳〵持ちて、街を踊りつゝ錢を貰ひ歩いたさうである。この乞食達の達磨踊は直接に禪僧から教をうけたので、藝者達のよりは法に合つて居たと云ふ」と。

斯くの如く川柳詩研究上繙讀せねばならぬ材料滿載であるが遺憾ながら非賣本であり私も再閲するを得ない。終りに達磨の看板としては表具師と煙草屋のものが說かれて居る。それらは私も見て居るが、古川柳には癩病のダルマは屋根に數十年神田鍛冶町の達磨藥、癩病の）の看板を詠むだものであらう。

（二百二十日記）

路傍ッ戸時代

水野長雫

K兄

腹の立つ間は人間修業が足りないのだ。

人間はすべからく人形になるべし。

人形の足は蚊がとまつても痛痒を感ぜない。

亦人間にも虫ケラがうよ〳〵してゐるのを忘れぬやう。

「人民は莫迦でなく取調べる人は豪い」などと皮肉を社會へ浴せるうちは未だ若い考へ方だ。

五十になつても若く見える君はこの際おもむろに髭をたくはへるべし。

嚴かに見えてなか〳〵人間のうちでも一段榮えて見える。

君は「僞善」といふ衣を被る事をも知らない。

暑くとも冬服をつける、寒くとも羅（うすもの）にかざりたてるのだ。裸になつて臍を見せては第一雷がやかましい。

つまり辛棒と我慢が肝腎なのである。

君は長いものに卷かれる事をも知らない。直ぐ「すまじきものはお宮づかへ」などゝ淨瑠璃の文句を思ひうかべるそも〳〵それが不可ぬ。呵々。

（八月十三日）

三日目一時間給水吳風景　吳　大塚五厘棒

水無し日火事は大きく燒けてすみ　同

雨を戀ふ眼に痛々し茜色　同

手術室擔がれてゐる意識あり　下關　中村九呂平

水泳が十六ミリに追はれてる　同

死んでもミ頭張り透す不倖せ　大阪　山本葉光

家出したわけ父親が知つてゐた　同

チンドン屋眞面目な顏で電車に居　大阪　寺尾破衣

戰場へ來てトラックの有難み　同

歳はもう取りたくないよ女給の瞳　大阪　山岡鐵水

蛇嫌ひ繩の姿にまで怯え　同

雨乞の一人若いのが無口　下關　多田市多樓

挨拶は座して團扇を借りてから　同

病人を見舞ひトマトの數かぞへ　大阪　岩崎水虹

秋立つ日カンカン帽を忘れミき　同

ヨーロッパ戰爭もスポーツ競技ミし　長野縣上山田　佐二木千隈

居候泰然ミして移民說　同

大掃除寒さの構へついでにし　大阪　吉田凡太

斷食の表へ今日も八百屋來る　同

末席で子持氣樂な箸をミり　大阪　山川富士

外出の新兵は擧手の順を待ち　同

事務多忙机から見りやハゼ日和　廣島縣　紫浪

女事務別嬪すぎて仕事せず　京都　八田鐘生

旅で聞けば京は好いミこばかりなり　同

早熟な子の姿にも似てダットサン　同

非常時だ妹ミいふてをけばよし　下關　岩崎勇記

藥屋は客の病氣になつて賣り　同

魚つりの船へマツチをなけてやり　大阪　今西湖秋

義太夫の出來る男に親が惚れ　同

蚊取線香一寸程の灰が落ち　大阪　津路紅多呂

戰爭は戰爭ミして働こう　同

横丁で千人力をたのまれる　大阪　吉田湊万

金のいる親族會議逃げたがり　大阪　堀毛一龜

母も娘も同じモンペの柄を着る　下關　東方司半休

兎も角も親の社長へ聟が來る　下關　河村暢爺

すぐばれてかまはぬ虛を使ふ孫　堺　野島夢女

最高を出た娘は親ミ別居をし　ハワイ　長谷川猿吉

押しの手は角力ばかりでないナチス　大牟田　高田抱逸

だまされた娘淋く肩で泣き　大阪　藤川鈴峰

夜業の灯はなれ吾身を取戻し　兵庫縣　奥田綠水

廢物利用で塵溜景氣なし　朝鮮　崔宗錫

亡妻がまだ〳〵見える酒の醉　京城府　古川照波

坊ちやまのギター雨だれの音に似て　大阪　藤森小雅子

貝釦

岡田某人

自分が泥の中にゐるからつて、何も他人までそん中に引ずり込まうなんて、氣がよすぎる。思召通りになつてやると嬉しがらうが、そうは行かない。引張る力が實はグライダーのゴム綱の役をしてゐるなんて夢にも御存じなからうな。だが引ずり込まれた樣な顏をして、所どころにちよい〳〵と泥を塗つてみせるのも一の手として面白いかも知れないが、それも靴や着物だけにして貰ひたいものだ。何時でも脫げるからな。

※

鷄。——みな腰に手を組んでやがる。

※

らくだ。——さつきの豆をまだ嘗てゐるんですか。

※

必要不可缺で、しかもこれ無かりせばどんなにせい〳〵するだらうと思はれるもの。——例へば、金、胃袋。

※

ひとがノートを書いてゐると覗き込む男。——神經缺亡症——こんなのが、眼のまはりを黑くして塀の節にかゞむんだらう。

※

お役所は堅うて結構で御座いますわ。いえもう、堅いのが何より。お羨しいことですわ。はあ。——家賃を集めに來た家主。

※

不倖でない身上ばなしといふ奴に、一度お目にかゝりたいものだ。

※

機械。理窟には叶つてゐるが感情を無視してゐる。高さ一メートル。幅もそれ〳〵約一メートル。ネヂやや、把手やハンドルや、何やかや、およそ二三百貫はあるだらう。それで、百枚ほどの紙を截るんだつて、笑ふのさへ氣がひける。

※

見つめられたら凍つてしまひ相な瞳。

※

思つてゐるとほりのことを、一分間でいゝから、そのまゝに喋る事が出來たらどんなに素晴しいだらう。勞働者だとか農夫だとかは平氣でそれをやつてゐるんだが、その代り、自分が何を考へてゐるかを、實際よくは知つてゐない場合が多い。

※

いゝお天氣ですね。息をするのが惜いやうです。

※

交際は交際としてだ、僕には他人を相手にするだけの暇もなければ、さしあたり興味もない。誰が何と云はうと、こちらの勝手にするばかりだ。ざまあみろ。

※

お目に掛れて大變うれしいです。もう餘分の想像や尊敬を頭の中で繰返さなくつてすみますからね。

※

人形。——あつしもいつか、あんたのやうに他人を思ふまゝに動かしてみてえもんだ。

傀儡師。——ちえつ。おもしろくもねえ。いつでも代つてやらあ。

上海便り

植山九天

西陽をうけて兵隊さんが檢閲してゐる。日の丸のありがたさが今更ながら身にしみる。

大場鎭に行く路端、練瓦だけ殘してやつと屋敷跡と思はれる所、一面にコスモスが亂れ咲いてゐる。こゝらに人が歸り、平和が來る時を樂しみに頑張れ〳〵。

崩れ落ちた練瓦の中から名を知らない花が一本咲いてゐる。寫眞に相當自信がもてる此の頃早速パチリ、寫眞に花の色が出ないのは殘念。（一四、九、一四）

紀行句を見て

丹波斗士

九月、日は忘れたが、麻生先生と渡邊氏とが來訪せられた。いろ〳〵雜談の末「先生私は作句も駄目ですが、川柳の題をつかむことに困つて居ります」と云つた。ところが先生は鸚鵡返しに「アナタは酒の句を專門に作ればいゝではないか」と言はれたので、本當にそれもそうだと思ひました。自分は先生が歸られてからハタと膝を打つた。全くそうだ。近いところに席題が澤山あるのに氣づいた。

さてと思ひ、色々と思案をして見たが、一向何も出てこない。（酒を飲むことならソウ人後に落ちぬつもりだがと思つた）實に不甲斐無さを痛感した。

なあちろりこれから秋に親しもう（露團先生作）

此樣な調子のいゝ耳觸りのいゝ判り易い傑作の句が僕の生涯に一つでも出るか知らん、全く心細い次第だ。

九月號の「川柳雜誌」が屆いた。早速開いて見た。目次には「肥的瘦的一塊兒的三天」と支那語の題を發見した。頁を繰つて見ると戸田孤篷、石井白面人兩氏の奥津、湯原兩溫泉への紀行文らしいから一讀を續けた。この奥津溫泉については一昨年頃かと記憶するが朝日新聞社の松本君から此の溫泉へ酒を送つて吳れと依頼を受けたことがあつたので殊に目を引いたのである。

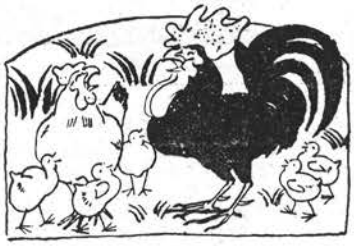
紀行文と句を對照して幾回ともなく判讀した。どれもこれもが面白く、愉快に讀めて宛然旅をして居る樣な氣分に浸つた。

如何に研究、洗練された先輩とは言へ斯くもうまくフイルム式によく作句の出來たものだと感服した。初心者の僕には川柳入門の讀本の如くに思はれて此稿に對し感謝の念を持つた。そして私も是非一度此コースを賴りに境界の大阪を離れ山峽の奥津の地に二三日の清遊を心に誓つた。

此後も先輩諸兄方は大いに初心者への指針として斯くの如き紀行的川柳を文に混へて掲載して欲しいものだと思つた。

碁敵は　酒飲んでから　敗けつゞけ

Sata Special Klinik
呼吸器病科
診療　毎日午前
醫學博士 佐多愛彦 電北38
醫學博士 加藤謙一
醫學博士 螺良四郎 電尼崎1151
內科
市電堂島中町停留所北辻西入
佐多醫院
大阪堂島北町　電北八二八四



武玉川三編研究

（三四）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(661) **文か屆いてかわる夕くれ**

省二＝廓から文が屆く。夕暮になるにつれ氣はそは〳〵する。足がむく。

東魚＝文が來たので、又氣が變つて、遂に廓へ足を向けてしまふ。

秋の屋＝磁石の針のやうに北へ廻る。

(662) **男に持つて見れは皆夢**

東魚＝思ひ叶つて意中の人を得てみれば今迄の波瀾曲折は夢の如くである。

秋の屋＝夢が醒めて呆然とするの歟。恐らくは理想が外れたのであらう。

省二＝戀は道中が面白い。思ひ遂げてみれば夢の如し、やがて倦怠も生ぜむ。

(663) **夜食の喰人殖る宵鳴**

東魚＝鷄が宵鳴すると火に祟ると云ふ。今夜何事かなければ良いがといふので、充分夜食をとつて用心する。又、晩くまで用心に起きて見張りしやうといふ心持ちもあらう。

秋の屋＝火災の豫防に立働く人達である。

省二＝今日でも鷄の宵鳴は忌む。ある地方では鳴く鷄が向つて居る方から出火するといふ。朝鮮の鷄は、たえず、宵鳴をする。

(664) **役の行者の立て居て喰ふ**

省二＝役の行者らしい。

東魚＝簡素な行者らしいふるまひが思はれる。（土工部屋などは今でも、飯台の廻りに立つたまゝで食事をとつてゐる。）

秋の屋＝深山幽谷を跋渉する場合であらう。

(665) **つれない心羽二重に倦**

省二＝羽二重に倦くとは、もつ體ない心情事にあいた心。世間をあきらめかけた心。

東魚＝浮世の面白い事に、もう倦きてしまつたので、情事などにも最早興味のないのを、つれない心と云つたものと思ふ。

秋の屋＝自分自身をつれないと云ふの歟。他人をつれないと責るの歟。少し曖昧のやうに思はれる。

(666) **内から帶の締るかんにん**

東魚『臍へりきみの廻る勘忍。』臍下にウンと力を入れて勘へ忍ぶ。帶も締る氣分がする。

秋の屋＝臍下丹田に氣を落着けるのである。

省二＝ならぬ、かんにんする態度。

(667) **愛宕から見る祝言の家**

東魚＝自分は云はゞ失戀なので、遙かに其人の今宵祝言する家をみやる場合。（愛宕は光秀謀叛の決心をした處で、何か不滿に適はしい氣ととれるが、チト打ち廻りすぎるかも知れない。）

秋の屋＝只あか〳〵と燈火が多く點してあるのを、今宵祝言をする家だなと、遠望するとであらう。併し嫉妬の意を幾分か含んでゐる歟も知れぬ。

省二＝「掃溜を上から覗く愛宕山」四里四方全部眺め得たといふから。

(668) **ぢろりと見ては通る捕伏**

省二＝ヘンな眼つきで見ては通りすぎる。だが「捕伏をはじいて通る日和下駄」よりは、ましだらう。

東魚＝通る者が皆一瞥をくれて過ぎ去る。

秋の屋＝異説無し。

(669) **宵の氣て胞衣を理れは山かつら**

省二＝胞衣などは、明るくならぬうちに處理し埋めたもの。然るに、もう山の端に曉の雲が懸つてしまつた。取込みの樣子が判かる。

東魚＝お產の騷ぎで時間のたつのも知らずに過したが、まだ宵位に思つてゐたのに、夜が明けそめてしまつた。「山かつら」は曉と解して良いと思ふ。

秋の屋＝昔は胞衣を不淨の物として、日光に當てなかつたのである。

(670) **腹立ふりを戀のはたらき**

東魚＝腹を立つた樣子、それも戀〳〵るものの一手段である。（すねてみたり怒つて〳〵たりするのも、戀する者には結局楽しいのであらう。）

秋の屋＝「其手代その下女書は物言はず」といふ古川柳のやうな場合であらう。

省二＝夫婦喧嘩奬勵論にならひ、戀のはたらき腹立ぶり奬勵論が成り立つ。

(671) **牢人の心に着せる蓑と笠**

東魚＝簑笠で世を忍ぶ樣な心持ちでゐると云ふのか。

秋の屋＝「笠着て暮らせ己が心に云々」の道歌を採つたものであらう。

省二＝浪人となる以上、當然の心構だ。

(672) **娘のほとく生鯛の絲**

秋の屋＝生鯛を他へ進物にする場合は、其の尾を白紙にて包み、而して頭より尾に掛けて絲を張り、上へ跳り擧るやうな形にして、臺に載せたものであるが、この句は結婚の結納の生鯛で、糸をほどく娘は、即ち嫁となる女である。

東魚＝生鯛ではないかもしれぬが、「鯛の糸切れて仲間靑くなり」があつたと思ふ。娘がときめく胸を押へて、糸をとく處に趣きがある。

省二＝美しい感激は表示されて居る。

(673) **迎搗て下戸のぬき足**

秋の屋＝旅より歸る人を迎へる酒宴の席を下戸が拔足をして、其場を外すとである。

東魚＝旅迎への顏振れが揃つた處を見ると、これは〳〵と思ふ斗りの飲手揃ひなので何れたゞではすまぬ事と、今から恐れをなして、拔き足で從つて行くと云ふのであらう。

省二＝私には判然とせぬ。前句が欲しいつまりは下戸が小さくなつて居るわけで、無論下戸と「迎」の一人である。

(674) **口のはしこい方か村雨**

秋の屋＝謠曲の「松風」で、口賢いのは姉の松風よりも、妹の村雨だといふので、その實は謠曲「松風」に較べて、或る家の姉妹を批評したものと思ふ。

東魚＝姉の方がどうも、おつとりとしてゐるのは、世間一統兎角にさうである。そこに此句の輕い穿ちがある。

省二＝口はしこいではあらうが、「村雨を相談づくで先へねせ」で、やはり妹らしい呵々。

(675) **雨か止んてもくらい中宿**

秋の屋＝中宿などといふものは、公然と營業するのでない故、入口に格子でも建てゝ、家内は薄暗くて、降雨が歇んだ後も、猶明るくならぬとである。

東魚＝晝は人の出入りも少ない淋しさも暗さを思はせられる。夜はこれに反して、降る日も華かな灯に、明るい思ひがあるであらう。

省二＝商賣柄暗い方がよい。

(676) **翌日は氣のぬけて居るぬくめ鳥**

省　二＝鵰などが寒い時に足を温めるため小鳥を一夜掴むでねる。翌日は放ち逃しやる事は、前出鷹匠の句の折り詳述されてある。「曙は夢みた顔や煖鳥」(文曉)。小鳥は放たれて夢見た心地、氣のぬけた心地であらう。

秋の屋＝一夜戰々兢々とし、生きた心地もなく、翌朝に至つても、猶且氣拔けのした態だと云ふのである。

東　魚＝上五は「あくるHは」と讀ませるのであらう。音讀しては感じが硬い。助かりはしたものの、腑のぬけたやうになつてゐる處に、小鳥のあはれさがある。

(677)　**律氣に持ツてくらい松明**

省　二＝松明でも提灯でも、餘り律氣にもつよりは、上げたり下げたり、右にしたり左にしたりする方が明るい。

秋の屋＝昔の松明といふものは、手に持つて打振りながら歩いたやうに想はれる。

東　魚＝右に持つたら持つたきりと云ふ、馬鹿律氣な持ち方をしたのでは、暗い場合がある。時に左に振りかざし上に下になど適宜に打ち振つてくれねば駄目だと云ふ心持「律氣に」に言葉の面白さがある。

(678)　**下女の奢も荒神の荒レ**

秋の屋＝「下女の奢」とは美服をするの歟。美食をするの歟。少し不明であるが、「荒神の荒れ」といふのは、厨の神として祀られる荒神に、下女が祟られたとでも云ふのらしい。

東　魚＝下女が奢つた振舞ひをするも、もと〳〵亭主が悪いからと、女房が荒れるのを「荒神の荒れ」即ち台所の神様の荒れる事であると、云つたのではないか。

省　二＝荒神様が荒れるとか、怒るとか云ふのは、竈の神だから火を粗末にしてはいけぬとの用心の外に、女房の不機嫌を意味する事は、少年時ナゴヤに於て度々耳にして居る恐らく今尚ほ言はれて居ると思ふ。辭書に荒神様を下等社會で女房の謂とあるが、下等社會には限つてゐないやうだ。(尤も上流では言はぬ。)句意は東魚氏説。下女の我儘は多くは亭主のチョッカイにある句例はある。

秋の屋＝「奢」を「驕」の當字とすれば、前の如く解釋される。「竈將軍勘略之卷」といふ黄表紙に、「見得ぼうとしわんぼうの中へ、山の神の辛棒を加へ、三ぼう荒神と現したまひ云々」とあるから、女房を荒神とも云へる。

(679)　**三ツに成と枕はかなし**

秋の屋＝幼兒が三歳になる頃は、寐ても直に枕を外して、一つ處に安定せぬと云ふのであらう。

東　魚＝三つは髮置で、初めて型ばかりの髮を結ぶ。折角のその髮をくづすはかなき枕となると云ふ意か。

省　二＝前二解にて盡す。三ッと斷つたのは髮置の事が腹に有つてならむ。

(680)　**直し目に成るか人の衰へ**

省　二＝青年時代は客氣にはしる。眞面目になるのは、段々年の効を積むでから、「人の衰へ」は意味を含ませて巧み。

秋の屋＝四十而不惑で、人間も四十になると、初老と呼ばれて、身の衰を感ずるのだ。

東　魚＝家に寢る日を數へる位、廓に入浸つてゐたやうな時代と違つて、キチン〳〵三度の飯も、家で喰ふやうな氣になつては、人間もモウ老込みだと、表面自嘲的に云ふ處が江戸人の享樂肌の氣質で、實際衰へたりと云ふのではない。

省　二＝さういふ自省した態度は、道樂の果て、先づ四十位にならねばネ。四十くらがりで事實肉體の衰へは出る。

(681)　**跡から消へる後家の分別**

省　二＝後家の身だから、何にかにつけ萬事考慮は拂つて居るものゝ、やはり女だ。分別があとからグラついて消へる。

秋の屋＝蠹に截つた黒髮を又伸ばし、紅粉をも使用するやうに成る。

東　魚＝この場合「消へる」と云ふ措字は巧いと思ふ。

(682)　**見合て向ふの家も毒に成**

東　魚＝上五「見合はせて。」向ひ同士に若い男女が居ては、兎角毒に成りがちであらう。

省　二＝お説の如し、「毒」の字、妙。

秋の屋＝或は同業の商店が、向合つてゐるのではない歟。

(683)　**文を逆さにふるふ爪網**

秋の屋＝「爪網」が全く不可解。

東　魚＝想像するに、爪網に琴爪を入れてある網袋であらう。この中に大事な文を一所に入れて置いたのが、琴爪を出さうと逆さに振つた時、一所に出たと云ふ場合と思はれる。

省　二＝私も爪網を知らぬから言へず。

秋の屋＝琴爪は小函か小袋に容れるが、これを網に入れる事もある歟。私は此の説に左袒出來ぬ。

(684)　**氣違も春のものとは也にけり**

省　二＝(513)「陽炎の中に乞食の物狂ひ」があつた。陽氣のせいだ。春だとか秋だとかに、物狂が點綴されて居る。

秋の屋＝能樂や演劇の物狂は多く春である

東　魚＝華かな春にして、一層の哀はれさが思はれる。

(685)　**子の聲も鼻にかゝつて紀三井寺**

省　二＝和歌山市外にある西國三十三番札所の第二番、御詠歌の聲だ。子供を持出したので一層の哀愁をそゝる。

秋の屋＝「鼻にかゝつて」は、遠國の者である事が知れる。而して一層哀れを感じる。

東　魚＝「鼻にかゝつて」は、遠國の國訛りといふより寧ろ、涙聲の方の意と思ふ。何れは遠國でもあらうが。

あらゆる趣味のお稽古場
手はごきから奥義まで
氣輕く、樂しく、御上達
松坂倶樂部
會員募集
お稽古種目
長常磐
清小鳴物
津元唄
尺八曲
舞踊曲
箏能樂
ピアノ
聲楽
書道
日本茶道
華道
洋料理
川柳
俳句
道理
氣
棋
學
道
松坂レコード
吹込所
川柳講座
川柳雜誌主幹
麻生路郎先生
擔當
はみ込申御
七階
松坂倶樂部
話電(表代)三〇〇三戎番
松坂屋
大阪　日本橋

川柳 句例と題解

＝路郎編＝

(7)ヒステリー

★ヒステリーと云ふ言葉はギリシヤ語のヒステロス即ち子宮と云ふ言葉から轉化したものである。この病氣の特徴として體内に球塊の如きものが昇降隱顯することがあるので子宮が體内を自由自在に徘徊し生殖慾が旺んに燃えるのを滿足させんために起るのだとされてゐたのである。從つて婦人獨特の病氣だと云はれてゐたが醫學が進歩して男子にも小供にでも起る病氣であることが知れ、子宮說は消し飛んでしまつた。

★ヒステリーは腦組織に感覺運動の刺戟が起つても、精神上には弱く現はれたり、又は全く現はれて來ない場合がある。感覺麻痺や運動不能はこれである。反對に腦組織の刺戟に對して、非常に强大な精神反應、例へば感覺過敏、痙攣などが起ることがある。

★ヒステリーの原因は遺傳が多い。

★小供のヒステリーは一般に考へるよりも多いそうだ。

★ヒステリー性のものは兒童及び青春期に於て頗ぶる危機に富んでゐる。殊に女性にあつては家政、育兒の任にあたつても平和を破ぶり不幸を招く者が多い

★その特徴を少しく列擧して見ると、實に移り氣である。徒らに寄を術ふ。新を好む。虛榮心が强い。空想に騙られる。誘惑に陷り易い。新派悲劇の女主人公は殆んどこの種の女性である。

やつた品ヒスはつきりと覺えて居　路郎

御用聞きおヒスをこなすこつを知り　耕二

七色の聲でわめいたヒステリー　白面人

年下の享主がヒスの素なのさ　美根子

ヒステリーうつかり女中もほめられぬ　同

何といふそれがおまへのヒスなのだ　同

親ヒスに子ヒスをほめる小兒科醫　生々庵

ヒスですよどうせそうですよヒスですよ　同

朗らかさゆうべのヒスの忘れやう　同

これがヒスか皆にも聞いて貰ひませう　同

死にますともヒス第一卷の終り也　同

(8)內職

★內職とは「半端の仕事」又は「殘餘の仕事」と云ふ意味で英語ではOdd Jobと云つてゐる。

★內職とは(A)本業、副業又は其の他の作業の片手間に營む仕事である。(B)內職は本業又は副業を必ずしも前提とする事を必要條件としない。(C)繼續の如何を問はないし、生活資料た

道場生活斷片

生駒山道場にて

高尾亮雄

生駒山頂青年道場　石井白面人・高尾亮雄・中島生々庵・麻生路郎の面々氏

——一——

私は去年の夏から、冬、春、夏をこゝにすごし、いままた二度目の山の秋を迎へてゐる。七八、九、十月と殆んど寧日なく相變らずの炊事指導、相手變れど、主變らず、つぎから次ぎから登山してくる青年や女學生たちのため、朝も晝も夕も多少づゝは献立に變化があるが、道場名物の一にハンター・シチウといふのがある、一日を山に狩りし獲物をその晩料理して喰ふといふ假想でもある。

——ヂヤガイモは皮をむく必要はない、タワシでよくこすり寛の口で水洗ひをして、こまかく庖丁で……大鍋へ水は初めから一杯入れないやうに……生でも喰べられる玉葱の方は急いで入れない。牛肉はそのまゝ鍋へほりこまず、一度別の鍋でいり附けてをく。薄い表皮ができると他のものと混ぜていくら煮ても肉の眞味が逃げないのが妙だでないと折角の肉が出しがらになつてしまふて不味ョ。……何に砂糖、醬油、みりん、絕體に無用だ。山の料理はなるべくそのまゝ、本然の味ひを活すのが肝要、何んでも鹽味本位。何はなくとも鹽さへあつたら日本人は十日位安全に活きてをられる旅人はいつも一握りの鹽をルックの中に入れてをく心がけがなくてはならぬ。これからの青年は大陸の地の鹽になる覺悟がゐる。

——二——

こんどは飯炊——米はそんなにゴシ〳〵磨いだらダメだぞ、水さへ幾度も變へたらそれでよろしい。飯盒が沸いてきた、もう暫くフタをおさへてそのまゝにおきなさい。木の枝でコツ〳〵と叩いてごらん、音で判る音で。もう出來上つたか、まだかそこは大に勘のはたらきだ。よかつたら飯盒の蓋の方と底の方とを逆さまにして少時をいてをく、湯氣が上下に萬遍なく廻つて素敵に好い御飯ができ上るものだ。

割木を割つて焚木をつくる。斧の使ひ方、火のもやし法、これが一大修業ぢや、ガスや電熱そんなものが使へない非常時を考へて見ろ、近ごろバスでも木炭になつてゐるぢやないか。人間が活きるためには、いやでもおうでも焚火の恩惠によらなければならない。周章ちゃ燃え上らない。心をよく鎭めて堪耐と細心の注意力が必要である。君たちは「千本櫻」の道行きの歌舞伎を見た事があるか、あの文句——そも〳〵飯の炊き方は、始めちよろ〳〵仲ばう〳〵、赤子が泣くともフタ取るナ——昔の人たちはみんなこんな芝居でゞも教へられたものぢや。「朝もコロツケ、晝もコロッケ」——こんな唄が一時代前、流行した事がある。當時のモダンワイフを皮肉つたものだ。——こんな事を嘆りながら時がたつて行く。

——三——

農村の青年たちの中には、シチウの汁を全く知らないものが多い。都會の嬢ちゃんには大根の千切りや、海のひじき、鰊のほんとうの味を知らない。女學校の割烹の先生の献立ときたらこれまた山ではどうにもならない。材料の選擇からして感念が違ふ。調味料でも一通りや二通りでない、あれやこれやとノートの上の取合せ献立で一切こゝでは役に立たない。何しろ豆腐屋へ三里の山の中ではやはり鄕に從つてもらはねばならぬ。こゝから本來に復つた、簡素な眞の家庭の新生活運動が起らぬとも限らぬ、といつて榮養カロリーを全く無視してゐるわけでは決してないのである。

ルービヒサア
大日本麦酒株式會社

隨筆

小山文三

電車

電車に乘つても陽の照りつける側は避けたがる。

然し空いてゐなければ暑い方にだつて腰かけねばならぬのが人情である、若し夫れ滿員だつたら壽司詰めの汗臭い立ン坊でも我慢せねばならぬ。

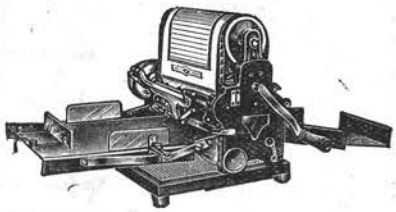
之れが環境に生くる手である。

ると否とは問はないが一定の收入のあること。(D)生計の主たる收入としないこと。などが內職の特質だとされてゐるが、或る場合には內職の收入が一時的に本職を凌ぐこともあれば、永續的でないと云はれてゐても、現代の社會組織の缺陷から內職を三十年以上も繼續的にしてゐるといふ妻君もゐるのである。

★俗に賣淫行爲、賭博行爲を彼の女や彼氏の內職かの如き言葉で云ひ表はしてゐる場合もあるが、法の許さぬこれ等の行爲は眞の意味での內職ではない。

★昔の浪人の內職は傘張り、楊枝削りなどがある。今の內職は多種多樣で一々列擧出來ないが夕刊賣、新聞配達、牛乳配達、貝釦、燐寸貼りなどが有名である。尤もそれが本業や副業である場合もあるので一概には云へない。

內職も今は話の種となり　源坊
內職の狹さへ夫戻つて來　佳山
內職の觀世の方で名を知られ　萬よし
里の母來て內職をぢつと見る　翠川
內職のための机が一ついり　開路
愚痴多き人とはなりぬ手內職　葉魚
內職の明日に迫る授業料　宵明
手內職夜逃げの樣にもつて行く　三華
內職をする氣にさせる主婦の友　白面人
內職の稿料だけは飲むつもり　孤篷
しばらくの積り內職板につき　耕二
內職のこつは子供が先づおぼえ　同
內職と知らず子供はうれしがり　同
人の聲に初手は內職持つて逃げ　路郎
內職でお米屋だけは歸らせる　同
內職をもうとめもせぬ夫なり　同

堀井輪轉謄寫機
妙速細纖

大阪市東區平野町二
伊藤喜商店
電話北濱(23)〇三二四番
九州支店　福岡市上西町
(型錄贈呈)

掛拂ひ

月末の四、五日前であつても瓦斯代や電燈代は文句なしに拂はねばなるまい。新聞代なども節季に少し早くても苦情なく拂つてゐるらしい。

八百屋、薪炭屋、米屋に、酒屋に、醬油屋などは月末には拂はねばならぬが、節季前にはめつたに取りに來るものではない。呉服屋は月末に取りに來ても少し位翌月に延ばしたつて不服のないものらしい。

書籍代が月給日に、洋服代がボーナスの翌日に支拂はれるのも普通の觀念である。

家賃が一番早く取りに來るし洋服代なんか少し後れても構はないし、料理屋の拂ひは、わざ〳〵こちらから持つて行つて序でに又次の借りをこしらへて置くし、生命保險料なんか半年位引ひ張るのだから、同じ掛拂ひでも、其考へ方に厚い薄いがある。これが慣習に生くる手なんであらう。一四——九——三稿

子兎

安川久留美

箱にうづくまる二匹の子兎
口もぐらしつ草咬めり、
その長き耳のうす紅も
夏の日蔭のたのしきや

×

やがて蟬のかしましさは
かれの耳をうごめかす、

×

子らの來て箱にかぶせる
金あみの戸を靜かにとるも
兎の子は
なほ箱に蹲りぬ。

街に住めば

高橋かほる

浪花座の女劍戟競演大會を見乍ら芝居が進むに連れて役者の汗。汗。汗。あ暑いやろ……八年前本社の納涼句會の餘興に赤城蔵の芝居に女形で板つきで出てゐました私は開幕前に強い電氣に照らされて暑うて〳〵エラからた事や待望久しき芝居が演れて思ひ叶つた嬉しさを思ひ出しそれにつけても東京の二南氏や青島の華水氏はどうしてゐられるやら——。

迷惑な連想

渡邊曉童

自分の店の印袢纏を着て客引きに出る宿屋の主人公がある。一寸した良い思ひつきだ。客引きまでおいてあるやうな宿屋だからと一寸泊る氣に成るだらう此の客引氏が案內して歸つた洋裝妙齡の美人が〇〇事件の犯人に似てゐる處から大變珍な騷動があつて、結局女學生時代宿屋の娘と同級生だつたので「まあ、あの客引さんあんたのお父さんだつたのね——てな事でザ・エンドとやれば一寸した五卷物位ひ出來るがな——と考へてみる。斯う考へてみる位なら別に此の大將にしかられやしないだらう。

書け一奇に
全国便箋

演藝・映畫に川柳を觀る

東西花形　**歌舞伎觀劇句會**

九月十一日　於歌舞伎座

(菊池寛作)**忠直卿行狀記**　三幕

褒めそやす殿の腕前あわれなる　夕鐘
お腕前勝を讓るに骨が折れ　同
眞槍で來たれと殿の顏蒼し　鮎美
殿の不氣嫌愛妾に手を引かれ　鮎美
一死あるのみ諫言の月あかり
傷心の殿をあはれむ大空よ

(野村胡堂作)**平次の女難**　三幕

身投げした女を月も知つてゐる　夕鐘
殺す氣が男の情に惚れかゝり
殺される場面となつた艶姿
平次の十手犯人を見逃がさず
手際よく女房を去つて涙ぐみ　鮎美
兄の仇うつ氣がにぶる美人局(つゝもたせ)
二人きり妖しきこゝろのあから(さま)
ちようちんの灯に片頰が光るなり
月あかり殺しとなつて井戸淒し

(玩辭樓十二面の內)**土屋主税**　一幕

足蹴にせられ源吾心で禮を言ひ　夕鐘
降りしきる雪へお園の琴となり
膝を打つ土屋主税は句を解し
詫入れる其角小さく見ゆるなり
降る雪に其角の筆は子葉どの　鮎美
寶船解(よ)めた主税の座りよう
月ほめる眼に討入を案じたり
松の木の雪に其角はどさと墜ち
物語る源吾へ雪は降りかゝり
うれしさの涙お園の立姿
血と雪のなかに生きてく義士(であり)
(名優中村鴈次郎をおもふ)

(岡本綺堂作)**涙華春雨**　一幕

あぶなげな繼前髮のとれたとこ　夕鐘
駕一丁色里の女が浮き出され
弟を見守るような戀をして
繪姿へのつびきならぬ父となり
心中の足どりとなり落ちて行く
うまいこと莫を吸ふて意見する　鮎美
九郎右衛門の人相書へ風があり
ひとすぢに死出の旅路へ急ぐ傘

映畫「カラナグ」觀賞

九月八日　於中之島公會堂

天才にあらず努力の子で育ち　曉童
カラナグの哀號へ父を茶毘にふす
父は亡くともカラナグがゐてくれる　——カラナグは象の名——
カラナグの背は少年の淨土なり　アート
愛情へ象であるのを忘れてゐ

川柳塔

‖路郎選‖

虫が鳴く今夜は誰ももう來ない
虫が鳴きそろ語りに來られ度そろ
原稿紙眞白な儘虫を聽き
晝の虫鉛筆で女給端書かく
靴一つ買つてやり親子とも嬉し
ビルの下人間の歩みのろいです
婦人帽笑はれてるを知らず行き
故郷へやる手紙女工へ虫が鳴く
蔭に女あればか話捗らず
栗燒けば少年のやう山を戀ひ

兵庫縣 寺井鋭々

取れてゐる釦に氣付く秋の風
多忙な人へ風も素通り

大阪 大西八歩

自轉車からパッと降りたがコーヒなり
屑鐵をトラックに積むものすごさ
きりぎりす一層お前と死にませう
敵軍の外に夜の蚊晝の蠅

大阪 橋本綠雨

郵便受選擧ばかりかつまらなし

大阪 高橋かほる

今日からは襖にかへて酒の味
運轉手も助手も話題を持ち合せ
出し物を一ッ拔かした女劍戟

大阪 奥村丹路

喋舌つてゐないと淋しくなる夫婦
やすものゝコップにあれど秋の水
秋を行く男の黑き折鞄
火葬場の煙突が指す秋の雲
帽子眼深に秋の夕べを歸來ぬ
こんな家に住みたく夫婦ふりかへり
生きとし生けるものゝ赤ん坊の口
クタ〳〵のハンカチを妻うけとりぬ
知性とは何さ默つてゐることさ
鼠鼠お前はヒクッな存在だ
家具部にて赤きベッドにつきあたり
眼の前にあるは彈力的な脚
よく眠ることさと醫師に教へられ
脂ぎつた顏が五十の顏なりし
吊皮にぶらさがる顏に嘘はなし
田の家の厠を借れば紙の窓
階段の極まるところ二人住み

張家口 岩崎柳路

金の工面してゐるそばにペルシヤ猫
拳銃も預る質屋支那のこと

京包線旅行

窓を明けて警乘員に叱られた

大阪 須崎豆秋

こほろぎが敷布の上にポツンとゐる
飛行機に乘つてる人が見える秋
汚ごれ目のわからぬ犬の子を貰ひ

南支 宮岡白峯

攻擊の前の日章旗と地圖と
軒にねて山にねて征く秋の月
蔣介石東を向けば秋の色
白兵戰聲なき朝の鐵甲

大阪 正本水客

阪急が見えて旅から歸つて來
食堂車リンゴの皮がゆれてゐる
食堂車朝の光にみちあふれ
食堂車前も一人でビールのむ
お彼岸の鐘アパートの窓を拔け
二等車に女は一人煙草喫ふ

目黑雅叙園(東京)

地下三階こけおどかしの廊下ゆく

父の病篤し

病室の父とメロンの話する
博士たゞ脈をみ舌を看る許り

父の死

酸素吸入出しつぱなしにして置かう

納棺(二句)

眠り給へやドライ・アイスに圍まれて
肉親と云ひ得ぬ彌陀の眉となり

大阪府 丸尾潮花

繪ハガキは樺太からの走り書き
同じ子に生れて涙すて切れず
別れても思ひは雨に通ふもの
甘黨は恩師を中に氣を置かず
バトロンだフアンだ女優暇がなし
血緣と云ふが案外冷たく出

水客君の父君を悼む

極樂を信じて父の北枕

大阪 岡田某人

蟬ビルへ來て夏終らんとす
風雲にとりのこされて喰ふランチ
あゝ君も青春通過組なのか

働いてゐる汲取りの無愛想
大食堂みな喰ふだけのたのしみか
琴の音やこんな世界もあるんだな

指の怪我

わが血の赤さに駭いたり指の怪我

兵庫縣　田邊山布

にんげんの好みへ海鼠さからはず
凡夫にも秋はしみ〴〵燈のゆらぎ
唖の娘が戀のしぐさか花を呉れ
ミかく君要領だよと上座に居
坐りたこがつちりして、祖母たつしや
良妻賢母時局型なる太い腰

尼崎　酒井斗風

一茶傳いよ〳〵澄んだ空を見る
バスにゆれ着いた燒場に海がみえ
銀行で他人の紙幣をみた眞晝
卷尺を伸ばしたまんまメロン喰べ
陶枕酒もお強き五十すぎ

溫泉で逢へば破産の聲でなし
闘志持つ友のうるさき黑眼鏡
草に寢て過去も未來も忘れてゐ

末弟應召一年

姑娘と寫し老母をよろこばせ

兵庫縣　水谷鮎美

松風の下に育つた觀世流
再婚の話閣から顔が出る
にんげんへ蛇のハカマは地を匍ひぬ
現實の悲哀電話の聲がかれ

播州松めぐり(九月三日)

人丸神社

人丸の神そのまゝに晴れわたり

尾上神社

相生の松へカメラを向けて立ち

(都戀しき片枝の松)

陽は東昔ながらの風が吹き

高砂神社

靈松は直射のなかの二千年

曾根の松

松の名所を酒落て見る也

姫路　白鷺城

車窓から見る名城に雲おほし
說明に聞くお菊井戸晝の月

大阪　姫田夕鐘

今日は居てはりまつかと家賃取りに來る
もう自活の出來る猫の仔を捨てに行き
俺よりちつちやい人が佝僂だつたとは

南支　市塲沒食子

彈道低し嚙みつく樣に伏せの聲
落伍即死なり頼るは水と足
明日も亦十里か足の手入をす
建築班長期註留の音をさせ
新墓標こゝでこうだと話す戰友
閑あれば寢轉ぶくせの老軍曹
一線で心ならずも無沙汰をし
父の事子の事夢は樂しき一つ
軍屬を退めて壽しやを開店し

同舟近詠

金澤　安川久留美

打ちつけた釘をぬいてて飯がくへ
黑蝶よ誰に教へてゐる舞か
砂ざくざくわしが記憶の村へ出た
貧しさは行李穢なくつみ重ぬ
北枕リンゴを撫でたきりだつた

兵庫縣御影町　長崎柳秀

つけられて居る氣がのかぬ闇の道
玩具ではすかせぬ孫に肚がすき
大陸はまだ〳〵逃げる廣さあり

金賣つて誰かと話したい氣持

友の結婚

俺達の新居僕等の陽が昇り
思惑の外れた手紙走り書き
榮轉の秘策は妻が知つてゐる
毛燒きするまでは自信のある料理
顏色を讀む修養は手を仕へ
無駄話女がゐるで締め切れず
秋風は生ある者のよろこびか
睨まれてゐるなと氣付く趣味の本
ハイヒール小遣にさへ事を缺き

廣島　濱田久米雄

雲の峰行軍兵を無口にす
菓子折に頼まれ事のやゝこしさ

神戸　潮田明坊

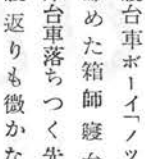
竹箒奉公はじめを廣く掃き
騷々しく忙しくなつてオペラ幕
釣りあげたらしい隣が煙草喫ふ
ものがよく騰りつゞくる針を持ち

ハワイ　高澤一浪

綴方ケフモサイソクニンガキタ
一ミ苦勞せよと神樣らしくない
日本の柱兵隊筋の家
神佛にたより恩給にもたより
一世のハッパ語レビューそつちのけ

大阪　渡邊曉童

男子志を立てゝ滿員電車にぶらさがり
酒ナンデー酒を忘れておつたのに
すいてゐるのに御婦人はすわらない
交叉點猫背をまけて急ぐ事
妻も子も無事かと月の虫にきこ



一路集

募集句

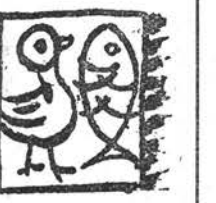
寢台車　山雨樓選

寢台車疲れて伸びて夢視つ　照波
寢台車の子供タンクの夢ならん　物數寄
寢台車夫婦別々子澤山　夢女
寢台車ボーイ「ノック」は至急報　神樂
諦めた箱師寢台車で歸り　文庫
寢台車落ちつく先で稼ぐ氣の　曉童
寢返りも微かな音の寢台車　抱逸
名物の驛賣もなし寢台車　松壽
寢台車送つてくれた妓を思ひ　久枝
寢台車眼鏡のまゝは寢つかれず　春巣
寢台の女ちよい〳〵外語出し　市多樓
寢台車食堂迄のハイキング　吉宣
寢台車此處は故郷の土の上　紅多呂
新妻へものが云へない寢台車　同
寢台車靜岡邊で連れになり　不水
お早ふと言ふ挨拶も寢台車　同
寢台車海はくろ〳〵荒れてゐる　水客
寢台車別れは外へ出て惜しみ　同
寢台車京都を出ると雨になり　斗風
事務的な見送りもある寢台車　同
元朝のメニューが遲い寢台車　南濃路
北濱の電報が來る寢台車　同
アダリンの夢をのせてる寢台車　葉光
寢台車ラヂオ體操の型で起き　同
早慶戰を見に寢台車に乘り　みづほ
寢台車明日の豫定は夢の中　同
寢台車枕の下は走る音　ぎん
早や起の順に片づく寢台車　同
寢台車窓開けた儘好い月夜　青風
寢台車朝のカーテン美しい　同
鐵橋の音で眠れぬ寢台車　同
寢台車妻は小說などを讀み　同
窓越しの月が涼しい寢台車　同
寢台車勇士にすまぬ足のばし　風葉
寢台車この大望をゆすぶれり　同
新婚でない顏をして寢台車　同
運命をまかす氣で乘る寢台車　同
寢台車支那から歸る肥へた人　同
(五)寢台車金婚式に伊勢詣　神樂
(五)出し過ぎたチップを想ふ寢台車　久枝
(五)寢台車その風鈴が親しめず　南濃路
(五)榮轉の富士を見上げた寢台車　同
(五)仕合せをゆるぶる樣に寢台車　水客
(人)寢台車不平なき夜へ目をつり　水虹
(地)寢台車もう大陸の夢を見せ　異天樓
(天)寢台車寢られぬ金を持つて居る　文庫

猿　柳兒選

あぶなげな所で猿は樂にゐる　彌生
いゝ天氣猿のくさりの伸びるまゝ　綠水
あれ以上未だ慾張つてる猿の頰　九呂平
園丁も猿に見とれる畫下り　松夢
叩かれて猿は不屈の齒を見せる　抱逸
檻の猿人間共を安く見る　文庫
猿廻し夕燒たゝへた宿に入り　一龜
猿の瞳と出合つてふつとあわてたり　水客
猿の眼のなかにも日傘美しい　潮花
カメラ持つ夫婦へ猿は背をむけ　斗風
人間の視線へ猿の無表情　青風
猿遂に蠅一匹へ腹を立て　春巣
呉れさうな方へ動いたお猿の瞳　久枝
意地悪いことをはつきり猿は見せ　謙南坊
猿しばし瞑目したが食ふとする　曉童
猿廻し這入りすげなう斷はられ　富士
猿廻しいつものとこで儲けてる　同
睦み合ふ親子の猿へ花が散る　異天樓
猿の怒氣眞赤に檻に突當り　同
猿がゐるとこまでにする散歩なり　久米雄
猿の仕草を笑へば淋びし　同
(人)アベックの猿も一口云ひたがり　靈子
(地)猿の鼻うや〳〵しくも物を嗅ぎ　水客
(天)コンパクト猿は矢庭に立ち上り　水虹
(軸)憤然とした猿嗤ひの中に居る　柳兒

協・川



★柳誌柳書を北支へ

川柳雜誌社では北支派遣軍の原口陸軍少將から皇軍娛樂所へ川柳雜誌社刊行の雜誌類の寄贈方を依頼せられたので早速「川柳雜誌」並びに路郎主幹の著書などを取纏めて發送した。

★川柳人貴族院議員に當選

大谷五花村君（川協名譽會員）は今秋の貴族院議員の改選に最高點で當選された。川柳人としては貴族院議員當選は君を以て嚆始とするだけに十二分の活躍を期待する。

★同情週間川柳大會の豫告

本協會の年中行事となつた第三回同情週間川柳大會は本年も十二月の吉日を卜して擧行することとなつたので近く委員會を開催し、その事業方針其他を決定する事となつた

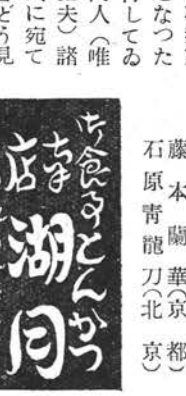
▲柳誌「きりん」を刊行してゐる國都川柳團編輯局同人（唯然・蛇太郎・泥柳・正夫）諸君から內地の柳社柳人に宛てゝ（一）滿洲の川柳界をどう見てゐるか（二）滿洲の柳誌に就て（三）滿支詣の讀み込み句に就ての三問を投げて、滿洲柳界の發展と向上の參考資材を蒐むるなど、近來滿洲柳人の動きはハツラツとしつゝある

★川協名譽會員十四年度の顏振れ

柳界の向上發展を期するため、昭和十四年八月から昭和十五年七月までの本協會の名譽會員が左の通り推薦された

順不同・敬稱略

榎田竹林（靜岡）
藤本蘭華（京都）
石原青龍刀（北京）
龜井晟修（函館）
伊志田孝三郎（名古屋）
村田周魚（東京）
森東魚（豐中）
中澤濁水（高知）
大谷五花村（福島縣）
蛭子省二（朝鮮）
早川右近（横濱）
池田可宥（朝鮮）
川上三太郎（東京）
小林不浪人（青森）
前田五健（松山）
前田雀郎（東京）
中島紫痴郎（長野縣）
大島濤明（大連）
坂井久良伎（千葉縣）
椙元紋太（神戸）
安川久留美（金澤）
塚越正光（臺灣）
梅本秋の屋（東京）
堀口塊人（大阪）



☆川柳人協會員を募る

會費　半年　一圓六十錢
　　一年　參　圓

申込所　大阪市西區江戸堀上通二ノ四六　昭和ビル
川柳人協會
振替大阪三一五一四番
理事長　麻生路郎

川雜・案內

大號活字十四字詰三行金五十錢、一行增すごとに金十錢（但し前金切手代用可）
改號、移轉、句會案內、書廣告、その他

しなの
川柳
一部拾五錢　一年一圓八十錢
松本市大名町
しなの川柳社

京
一部十錢　一年一圓（稅共）
京都市御幸町松原上ル
發行所　京都川柳社

東毎の代表誌
川柳草薙
一部一〇錢　一年一圓（郵稅共）
名古屋市南區八熊町寺田
發行所　草薙川柳社

川柳きやり
菊判每號六十數頁
毎月一日發行　一部廿五錢
東京豐島區高田本町一ノ一四六八
川柳きやり吟社

月刊
川柳
伊豫
一部拾錢　一年一圓廿錢
松山市南柳井町五九
愛媛川柳社

みちのく
一部十五錢　一年一圓五十錢
青森縣黑石町　川柳みちのく社

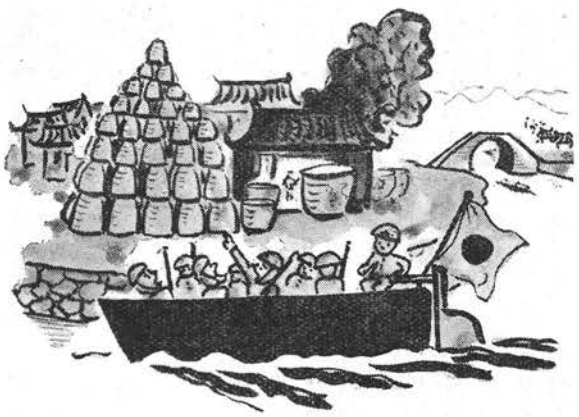
川柳大陸
一部　二十六錢　一ヶ年　三圓
大連市仲町九
川柳大陸社

春聯
一部　二十錢　一年　二圓稅共
大連市薩摩町一六一森崎方
春聯川柳社

柳友
一部拾五錢　一年一圓八十錢
東京市杉並區和泉町八四
柳友會發行所

漫畫陣中鏡

南支　北みきを



○月○日
今天美熱！（今日は馬鹿に暑い！）
○○へ警乘兵で行く。
クリークをボン〳〵と木船にゆられながら水ガメ屋の前を通つたら、「あの一番上のを買ふといつたら水ガメ屋のオヤヂ困るやらうなアー…」と一人が云へば又一人が…「なーに、一番下のをくれといつた方がオージョーするぜ！」すると戰友のOが、「俺は一番下の眞中のが買ひたい。ハアハハア…」
一同もこれには「成程ナア…ハアハアハ…」
兵隊は他愛のない事をいつては笑ふ。笑ひは兵隊のカロリーだ。
無事、○○へ着く。
風呂にはいつて、床についたらマラリヤ蚊がチクリとさしよつた。

柳界展望

全國川柳界のこと各地川柳人の一擧手一投足を此展望欄ですぐわかる樣にしたい皆樣の御通信を歡迎する（編）

催

▼川柳雜誌社は九月七日午後七時から誓得寺で川柳忌を修した▼三日、十七日午後一時松坂倶樂部麻生路郎川柳講座。▼四日このみ川柳社寡家月麻呂君入隊祝賀句宴。▼十四日、二十八日夜六時有恒川柳會。▼十七日夜尼崎住友金屬鋼管製造所親友會句會。▼二十三日阪田オフイス川柳會。▼二十五日午後四時阪大川柳會以上いづれも路郎主幹出席。
▼京都川柳聯盟（京都）では九月廿三日仲源寺に於て川柳忌句會を開催▼葉ざくら句會（大阪）は九月廿四日寶塚へ吟行をされた▼このみ川柳會は九月三日例會を中道八坂神社に開催。▼昭和川柳社は九月六日大阪貯蓄南會館にて例會開催。▼川雜下關支部嚴柳社では九月廿四日菊月例會を開催。▼水郷川柳社（愛媛）は歸阪の花房南葉氏を圍んでの句會を催された。▼川雜廣島支部（廣島）では九月十八日、廣鐵倶樂部に於て奥富天作、木暮三平兩君を華北鐵道に送る會を開催され其の行を壯んにされた。
▼津々良會（京都）では九月十日素朗人居で小集を催された。
▼國都川柳集團（新京）の大井正夫君等は九月八日夜佐々木三福氏を圍んでの小集を開催された▼川柳大陸社（大連）では九月廿一日、扶桑仙館で川上三太郎氏歡迎句會開催。▼撫順川柳社（撫順）では九月廿四日、石原青龍刀、川上三太郎兩氏歡迎句會開催。▼台北川柳會では九月二十三日川柳忌句會を催された。
▼三越川柳會天守閣九月例會を二十九日開催葭乃女史出席。

消息

▼市場没食子君より（南支）（前略）『只今○○に居ますが海邊で凉風あり、避暑に來てゐる樣な結構な有樣です。その代り永の一線から退いて市内警備ですから市内の復興と共に赤字々々の生活をやつてゐます。然し一線に出て行つた戰友は再三再四の敵襲に曾て私達のなめて來た緊張を續けてゐます。南支派遣軍報道部で發行してゐる「へいたい」と云ふ雜誌で酒井美知夫君の名を川柳欄で見出した時なつかしい思ひでした。白峰さんにもお目にかかる機會はないと思ひます。……』（以下略）八月廿六日
▼岩崎松代さん（張家口）が九月十六日、所用のため來阪され、卅日大阪驛から歸張の途につかれた。
▼川出美根子さん（兵庫縣）は近く大連、青島、上海方面へ旅立たれる由。
▼長崎柳秀博士（兵庫縣）は十月下旬、學會出席のため台灣へ出張される。
▼大島濤明君（新京）は大連の出口夢詩朗君奉天の宇和川木耳君揃つて來京、唯然、正夫君等と歡迎の一夜を快談された由。
▼澤田四郎作博士（大阪）は九月三日除隊になり十五日から再び診察室に姿を見せられる事となつた。
▼伊良子擁一君（神戸）『内外時事はあれだけのことと云ひ乍ら大いによろし「厚生大臣は誰だつたかな」「川柳雜誌を見てみろ」と云ふことにもなりませうし、「武玉川研究」だけでも吾々は貴社に感謝しなくちやならんと思ひます』云々の通信があつた。
▼奥田絲水君（尼崎）は大阪時事新報社印刷部へ入社された。
▼尼絲之助君（島根縣）は履物商新開店（大毎）、役場員の一人三役の上に八つを頭に五人の父で多忙を極めてゐられる由。
▼小川靜觀堂君（海拉爾）着任以來不眠不休、戰線へも出たが、一日二日遲く往つたら敵機にやられるところだつたとのこと。

慶弔

▼龜井晟修君（函館）の御令閨は八月に二女園子さんを儲けられた遙におよろこび申上げる。
▼正本水客君（大阪）嚴父は九月八日午後十一時二十分六十八歳の高齡にて永眠された。謹悼。

轉居

▼在間小樓君は愛媛縣新居郡角野村川口新田三區五十七號へ。
▼八竹正義君は大阪市天王寺區細工谷町九拾一番地へ。

★社告

不朽洞會員異動
北川春巢君（兵庫縣）は岡田某人君の推薦により十月三日入會された。鳥生古弗君（今治）は一身上の都合により九月末限で退會されたが川柳人協會員の方は從來の如く繼續されてゐる。

柳誌の誓文拂

★來る十一月四日（土）の午後四時半から六時半迄柳誌の誓文拂を開催する事とした
★珍らしい柳誌や合本の欠本を求めてゐる方々は是非御出席下さい
★會場は大寶寺町の誓得寺
★不用の柳誌を出品されたい方は十月廿五日迄に江戸堀上通二丁目昭和ビル内、川柳雜誌社へ御申込み下さい（但、川柳家に限る）
★研究資料と興味との一石二鳥のこの催に御賛同の上賑々敷御來會を乞ふ
★詳細の問合は往復ハガキ又は電話で本社「柳誌の誓文拂」係へ

主催　川柳雜誌社
後援　川柳人協會

大阪・天滿橋京阪前
（東區京橋一丁目）
中華料理　福園
電話東二三八九番

御料理
幸樂
堂島上二（大毎北横東〈三ツ目辻南入〉）
電北七七七五番

各地柳壇

いのちある句を創れ

路郎・豆秋整理

投稿規定

▼用紙は原稿用紙又は投句箋の事
▼文字を正確明瞭に記載のこと
▼開催月日及場所記入のこと
▼締切は毎月廿五日とす
▼投稿先は本社宛

川柳雑誌主催

川柳忌

九月七日　於誓得寺

初代川柳の百五十回忌に相當するので殘暑にもめげず七時の定刻には誓得寺の椽側にまで溢れ出る盛會ぶり、故吉田きよし畵伯描くところの川柳の一軸が一同の作句を緊張させた。各題披講後、鮎美氏起つて先月の句會吟の講評をなし、次いで路郎主幹の兼題「元祖」發表に先立ち「いのちある句に就て」と題して川柳忌にふさはしい柳話があつた。最後に里十九氏の華やかな相撲吟披講で十時過ぎ散會した。

出席者(順不同)

路郎・謙南坊・紫香・かほる・紅多呂・某人・鈴峯・湖秋・富士・綠雨・潮花・松太樓・綠水・鮎美・斗風・孤蓬・八九滿・夕鐘・夜王・光路・萬的・凡太・豆秋・默平・正路・八櫻・寄與史・彩泡・春巢・小柳子・頑童・里十九・一笑・竹莊・八歩・小松園・貞治郎・顯・白柳子・滿潮・大研子・指洋・村句茂・アート・葭乃・曉童

席題「養　子」　互選

養子いま噂の中に顔を出し　八九滿
娘より父に望まれ來た養子　松太樓
元の名で養子の友は呼んでゐる　凡太
案外に養子硬骨漢なりし　夜王
養子今日も澁い着物を着てゐます　萬的
世の中は廣しあの娘へ養子が來　春巢
金のある女房に養子惡づれる　孤蓬
敬遠の中で養子は肥えてゐる　潮花
財産をあてに養子に來ると云ふ　寄與史
減しもせずふやしもせず養子無事　曉童
御養子の下駄まつ直ぐに減つてゐる　某人
二次會へ養子としての氣を使ひ　一笑
盃を伏せて養子は聞いてゐる　豆秋
煙草屋の養子は店へ出てこない　富士

席題「孤　島」　夜王選

發見の孤島裸體の人に會ひ　滿潮
雨乞の火が見えてゐる離れ島　豆秋
淋しくも清く孤島へ子が生れ　八歩
はなれ島見えて傳說聞かされる　萬的
汽船また孤島の人を知らずゆき　紫香
英雄の末路に孤島名を知られ　彩泡
友軍機孤島へ煙草投下する　白柳子
何物か居さう孤島は茂つてる　紫香
孤島の朝人臭い煙を見る　滿潮
何事かあつた孤島の黑煙　光路
椰子のある孤島に淡い月がさし　斗風
日の丸が船から見える離れ島　豆秋
無電台あつて孤島も地圖にのり　頑童
來て見れば孤島も秋の風が吹き　一笑
本省の船來る孤島旗を出し　默平
松風に立てば孤島は陽がしづみ　湖秋
孤島にも時の話題がつたへられ　一笑
孤島いま戰鬪艦の波をうけ　滿潮
孤島今祖國の急を聞かされる　小松園
メガホンに孤島に近い島が飛ぶ　かほる
來る船も無く孤島暮れかゝる　潮花
孤島から旗振つてゐる御用船　豆秋
離れ島兵を發たせる旗を立て　某人
無電台だけの孤島に春が來る　斗風
孤島靜かに明け暮れるのみ　某人
(佳)難波船孤島の秋が美しい　鮎美
波濤萬里孤島へ記者の訪れる　白柳子
(秀)神話聽く孤島の月がかけてゐる　寄與史

席題「定　食」　潮花選

定食の子供へ母の箸が飛び　默平
定食でたりぬ子供を嬉しがり　小柳子
定食へ蠅の死骸を見つけたり　紅多呂
定食へ夫婦で坐る公休日　孤蓬
定食の同んなじものを喰べ殘し　彩泡
定食の漬物横にこけてくる　紫香
おごらせるつもり定食にしてしまい　竹莊
定食のジョッキに街の灯はあかし　斗風
定食のメニューにしゆみのある塲末　孤蓬
定食へ夫も醉へば妻も醉ひ　八九滿
定食へ女の箸の伏目勝ち　某人
定食が來る迄ビール飲んで待ち　一笑
レディメードのやうに定食すぐに來る　春巢
定食にきらいなものが巾を取り　夕鐘
定食へ大阪城はコッチヤ側　曉童
定食へ優等生はたゞだまり　八九滿
定食へ女に切れぬ肉があり　某人
定食のめしは食べない生ビール　豆秋
(佳)定食にして子澤山取りまかれ　鮎美

席題「廻り道」　かほる選

殊の外話が合つて廻り道　夜王
貨物車が動いてくれぬ廻り道　豆秋
出征の一團に合ふ廻り道　滿潮
廻り道して二次會をさけて來る　松太樓
廻り道美味いコーヒのある所　白柳子
土木工事矢印に廻らされ　綠雨
廻り道ビールのさかな買ふて來る　紫香
廻り道仰山に云ふ女客　某人
糸はんにすねられてゐる廻り道　潮花
敷島を買うてやつぱり廻り道　鮎美
朝顔を見せて貰つた廻り道　斗風
稽古屋の二階が見たい廻り道　八九滿
(秀)廻りみち女に肩をたゝかれる　小松園

席題「寢　汗」　某人選

寢汗かく夫へ寢酒呑ましてゐ　斗風
子の寢汗妻の寢汗の上を蠅　滿潮
兄弟のいびきを聞いてゐる寢汗　かほる
客席でのいびき寢汗をかいてゐる　紅多呂
後家たてゝ寢汗はひとりさびしまれ　鮎美
子の寢汗いきなり寢言きかされる　滿潮
味氣なく銃後の隅に居る寢汗　村句茂
正夢であつて寢汗の譯があり　紫香
寢汗してこの頃悔ひること多し　鮎美
寢汗などかいて姑の氣が弱り　潮花
寢汗したことを報らせた悔があり　白柳子
校庭の草に寢汗の論となり　鮎美
聽診器寢汗は出ないかとたづね　豆秋
(秀)故郷へ遠き寢汗の枕　八歩
(軸)寢汗を起きる特號の記事　某人

相撲吟「雨　乞」　互選

雨乞ひへ村は總出の道せまく　失名
雨乞ひのきちがい沙汰を笑はれず　八九滿
雨乞ひの空あくまでも晴れてゐる　松太樓
雨乞ひをひや〳〵させて入道雲　光路
夕燒のつゞく村雨乞の聲しきり　綠水
農業も工業も今年雨を待ち　紅多呂
氏神で雨乞衆が空見上げ　正路
雨乞へ云ひ譯だけの涙雨　寄與史
雨乞へ思はせぶりな雲があり　彩泡
雨乞へ無理に坊さんひつぱられ　潮花
雨乞ひの話しも出てる町會　里十九
雨乞ひへ遠くの空で稻光　一笑
娘十八雨乞ひの中にゐる　鮎美
雨乞ひの仲間外れに繪描ゐる　アキラ
雨乞ひのハッタと脫む雲の峯　某人
雨乞ひへ神戸はきつい雨になり　豆秋
雨乞ひにお地藏さんをかつぎ出し　夕鐘

雨乞ひに無智な犠牲を強ひる村　白柳子
(準)雨乞ひへ頼しさうな雲が見へ　小松園
(優)雨乞が利いて夫を探しに出　かほる

兼題「彼　岸」　豆秋選

彼岸の中日トンボを取つてしかられる　一笑
彼岸とは思ひがけなき人と呑む　白柳子
子を連れて彼岸の街へ乞食來る　鮎美
猫だけをのこし彼岸を皆んな出る　小柳子
お彼岸へもう有難い年である　松太樓
二階借り下の彼岸を拜まされ　春巣
彼岸には丈夫にならう水枕　彩泡
彼岸志へ母念佛のただまろし　鮎美
赤い夕日へ野菊一杖なる彼岸　寄興史
彼岸がすんでおばん又弱り　アキラ
お彼岸へ老母は歩くつれがあり　曉童
一機二機彼岸の空を西へゆく　斗風
彼岸詣り今年も電車乘り遅へ　かほる
お彼岸の人出に足袋は白くなり　綠雨
彼岸の貰ひ乞食夜食を考へる　夕鐘
生甲斐を感じ彼岸の杖をつき　謙南坊
お彼岸の千日鰻焼くにほひ　斗風
供養して彼岸の風の中にゐる　八歩
天王寺彼岸もすんで廣すぎる　富士
(秀)けち岸にどうやら妻のひまが出來　夜王
(軸)スキッチをひねると彼岸の鉦が鳴り　豆秋

兼題「元　祖」　路郎選

名物の元祖尋ねる京の旅　一笑
インチキの元祖淋しく幕を張り　寄興史
商才も見せ圓顔な元祖像　某人
受けついだ氣品元祖を思はせる　謙南坊
ひやかして元祖の方の店を出る　滿潮
紅ガラの格子付なり元祖なり　夕鐘
本ものゝ元祖に迷ふ驛へ降り　葭乃
元祖と云ふのうれんのすゝけよう　正路
デパートまで出張をする元祖なり　紅多呂
木綿着て働くだけの元祖なり　謙南坊
五六軒先きへ元祖と云ふが殖え　默平
元祖に相違ないのに落ちぶれる　市多樓
元祖今日謝罪廣告させてゐる　夜王
算盤に元祖の名前消えかゝり　謙南坊
裏町に廣い間口を元祖持ち　春巣
(人)春の風元祖の旗を染め替へる　八歩
(地)今更に元祖の熱に打たれたり　八九滿
(天)時勢には勝てず元祖の字にネオン　某人

雜川　廣島支部句會（廣島）

志賀寧男氏を山口驛長として送る會
九月一日　於　廣鐵倶樂部

宣傳、驛長、影法師、寄寢　濱田久米雄報

宣傳が過ぎて思はぬ事になり　伯峯
逆宣傳寢醒めの悪い夢で過ぎ　清登詩
宣傳が要るから藥高いなり　秋史
宣傳の道具にされる時の人　伯峯
驛長が時計握れば發車ベル　白外郎
驛長の留守に差出す手續書　雅水
驛長も飲めば理解のある男　紫浪
先導をして驛長は疲れたり　久米雄
終列車出して驛長ねむくなり　草雲子
驛長も擧手傷病車動き出し　麥作
影法師うかつに聲もかけられず　草雲子
影法師樂しい二人の影が搖れ　清登詩
影法師ふつと話題をかへさせる　秋史
影法師猫は恐る〳〵行き　草雲子
動かぬがなまじ氣になる影法師　寧男
いゝ仲が花火に浮いた影法師　紫浪
影法師お寺の塀が恐くなり　秋史
獨酌の過ぎた寄寢へ月がさし　清登詩
寄寢して明日のプランは出來てゐる　久米雄
良い月夜寄寢の窓に虫が鳴き　麥作
上役に叱られた顔寄寢する　久米雄

九月八日

行列、號外、躍る、雨戸、欠伸

萬歲になつて火の列渦を卷き　松岳
炎熱の下長々と蟻續く　かなめ
行列にたぎる興亞の熱血譜　三郎
電車道横切る列は走らされ　幽香里
遠足がみんな嬉しい聲で過ぎ　かなめ
行列を二つに裂いた交叉點　白外郎
陷落の文字行列の上を行く　同
行列に揃はぬ歌のそれもよし　俗菩薩
行列にゐる戀人に氣が代かず　須彌浩
殿様が行列止めた富士の山　かなめ
歡喜した提灯うねりうねり行く　伯峯
行列が駈足になる交叉點　須彌浩
行列の子に附添ひの母も見え　清登詩
行列の最後は女ばかりなり　市多樓
お行列東海道は春霞　かなめ
行列の中の一人を探す母　須彌浩
行列へ首だけ出した窓が見え　久米雄
行列が排英の熱どつと上げ　天國
遅れ來た友行列へ割込ませ　市多樓
行列へハンカチを振るビルの窓　須彌浩
遮斷機へ行列行けるだけを行き　幽香里
排英の行列ほかの話も出　麥作
囚人の列が小雨に濡れて行く　伯峯
行列の子が笑つてるうちの前　幽香里
號外は今横丁を通るらし　白外郎
號外へ眞劍な眼が寄つてくる　伯峯
號外の鈴兜町沸き返り　かなめ
號外へバリカン待つてもらふなり　秋史
號外に金策の膝くづれてゐる　市多樓
歐洲の地圖を變へるか鈴の音　三郎
課長まで行く號外はほゞ讀まれ　幽香里
號外屋三人目には投げて驅け　かなめ
號外を配り終つた音になり　俗菩薩
號外へ折り重つた顔と顔　清登詩
號外へ市場も一寸タイムなり　市多樓
歴史が變る號外の音　比呂史
號外へ一瞬別な顔になり　久米雄
大漁の唄銀鱗の躍る舟　須彌浩
令狀へ男一匹腕を撫し　久米雄
躍らせた身體が尖るダイビング　麥作
大陸の夢若い血が躍るなり　伯峯
オン・ザ・マーク躍る心を引きしめる　久米雄
躍り出たトロッコみんな寄つて來る　麥作
ダイビング伸び切つた脚見上げられ　秋史
躍る胸あまり明るいシャンデリヤ　俗菩薩
言ふだけは言ふて肉身貸してくれ　同
姉さんの惡口弟聞きすてず　かなめ
肉身の爭ひこれも宿命か　伯峯
詫言へ父むつつりと涙ぐみ　須彌浩
退院をして肉身に取り卷かれ　久米雄
肉身へ此の年でゆく氣儘なり　天國
辛棒をする氣故郷に母がゐる　久米雄
肉身の戸へぢつとゐる手術室　幽香里
弟の喧嘩兄貴が買つて出る　かなめ
肉身の義理へ袴をはかせられ　秋史
肉身をしみ〴〵思ふ年をとり　天國
雨戸皆開けつ放して獨り者　かなめ
ふるさとの雨戸古びて父も老ひ　麥作
雨戸又何時ものとこで引つかかり　須彌浩
いゝ月夜雨戸は開けたまゝ蚊遣　松岳
新婚の雨戸近所にさゝやかれ　かなめ
脊伸したついでに欠伸と一嚏　清登詩
生欠伸する程厭になつてゐる　幽香里
大欠伸して一本を喫ひつけゐ　白外郎
欠伸する子に來客は歸りかけ　幽香里
課長の眼欠伸中途で殺される　かなめ
欠伸傳染課長の席が空いてゐる　麥作
欠伸ふと含み笑ひをして座り　秋史

三人の夜のビール（大阪）

八月二十六日夜　ろくぎんどう報

夏痩せの顔にさびしき笑ひ見せ　形水
へら〳〵と泣き顔に似て笑ふなり　同
似顔かき顎の長さを着眼し　同
赤ん坊の顔モミクチャにして見たし　同
顔のきく飲屋へ足が向いて行き　夕鐘
うれしさの顔を鏡にのぞかれて　同
君もえらい禿げたなと顔を崩しあう　同
「阿部」さんの似顔で鮓を握つてる　鮎美
顔すでに〳〵平凡だと見られ　同
凹凸の鏡に顔のグロテスク　同
阿彌陀さまに似てゐる妻の夜の顔　同
郷愁のギヤングの顔の夜の光り　同

雜川　下關支部句會（下關）

多田市多樓報

海水着、張合ひ、夕立、日傘、
簟笥、麥飯、簡單衣、妻楊子、左
金槌と思はせたくない海水着　九呂平
砂を這ふたゞそれだけの海水着　暢爺
飾りとり去年のまゝの海水着　九呂平
海水着女中戀を知りそめぬ　千代香
張合ひのある一日が短かすぎ　哲志
張合ひで歌ふ愛國行進譜　陽峯
生活へ張合ひを持ち子の頭　代志久
デパートに張合つてゐる社會鍋　九呂平

躍る血へ張合ひもなく暮れる海　米三
君が瞳を追へば張合ひなく彼方　暢爺
夕立が過ぎて涼しい晝休み　代志久
夕立が追ひついてゐる集配手　半休
夕立のビルの窓から首を出し　千代香
夕立にあなたの方はと聞いて見る　文福
夕立の後透き通つた電車の音　勇記
夕立のしづくへ夕陽照つてゐる　市多樓
夕立を跳ねかしてるダットサン　九呂平
夕立に女あられもなく褰げ　暢爺
買つて來た日傘を家でさして見る　仙波
繪日傘を上向きにしていゝ女　千代香
繪日傘に外人の鼻高すぎる　同
繪日傘を橋のたもとにして映し　半休
うづまきの日傘の下に影二ッ　はつみ
眠つた子土産の日傘持つたまゝ　勇記
人を待つらしパラソル草に居る　米三
抽出を引けばナフタリンが臭ひ　市多樓
簞笥まで押へられたと泣いて來る　草路
先代の簞笥は奥の間にやられ　藤市
叱られた子供簞笥の蔭に泣き　哲志
夫への面あて簞笥〆る音　米三
手懸りは簞笥にあつた指紋から　不水
教練の後麥飯も何のその　双龍
麥飯へ笑のこぼれる初年兵　恐錢
麥飯を戴いて食ふ平和鄕　暢爺
欄干の風簡單衣涼しすぎ　藤市
簡單衣添寢の扇重く搖れ　九呂平
妻楊子もう夕飯のすんだ顏　市多樓
妻楊子未だ飲みたらん家を出る　同
籐椅子の欠伸へ落ちた妻楊子　不水
食べ當りして左繩ないはじめ　きくの
一杯の醉で左へ向けさせる　芥兆
左書き負傷兵から來る感謝　不水

川雜　**塗青支部句會**（大阪）

九月九日　於　染料會館
淺謙公報

雷、行水、工場、虫、灯

雷に追はれる樣な走り振り　枝折
雷が過ぎてやう〳〵飯になり　光路
行水の後で洗濯一しきり　枝折
順番があつて行水手間がとれ　香林坊
行水の冷たくなるまで遊んでゐ　謙公
煙突へボロそうな名が書いてあり　重夫
工場へ今日も平和な陽が沈み　子元
國策の線へ工場煙を吐き　光路
喰ふことに工場の笛の有難し　香林坊
虫籠があつてこの家平和なり　重夫
一節の糸に蓑虫身をまかせ　光路
夜店の灯靜かに避けて虫を賣り　謙公
灯を消して寢ることとして今日も無事　重夫
赤い灯の下で不平の酒を飲み　子元
終列車過ぎて孤驛の灯の暗し　謙公
窓の灯に立ちて征く日も近くなり　月草
灯を戀す死蛾の姿になつてゐた　香林坊
空き腹で歸れば無事な灯がともり　光路

川雜　**蒙疆支部句會**（張家口）

八月十三日　於　柳路居
岩崎柳路報

支那服、水害

支那服の寫眞大人然と撮り　愛馬
黑眼鏡支那服で行く北京の夜　史人
支那服も和服も似合ふ第二世　桃水
大陸の花嫁支那の服もあり　默人
支那服のあはれ眼の隈くろいこと　清水
馬懸兒（マーカール）の大人功者に手ばなかみ　四絃
洋裝も支那服も降りたダクラス機　柳路
一くせのある支那服の黑眼鏡　同
水害の思ひ出話し寒く成り　幽鳳
アパートに居て水害も人の事　同
特派員猫の流れた事も打電（うち）　默人
出水へジャブジャブジャブと男の子　同
見舞客自宅の被害も言ふて居る　同
洪水（みづ）あとの巖につれなく日は當り　清水
水害の工夫にすまぬ橋を行く　松代
水害の途歩聯絡へ鎌の月　柳路
下駄、醫者（八月二十日）
一命は取りとめますと警察醫　幽鳳
醫者の顏に集る不安な目と目と目　四絃
子の名前褒め〳〵診てる小兒科醫　默人
代診もピンポンへ來た晝休み　柳路
往診の目に美しい金魚鉢　同
下駄の雪落して今朝の宮詣り　齒那子
野戰風呂手製の下駄が二三足　桃水
衝突の相手に下駄をそろへられ　柳翠
松葉杖殘つた足に下駄をはき　默人
お土産の下駄正札のまゝであり　柳路
窓、笑（九月十七日）
窓越しに借りた電話の禮をのべ　柳翠
アパートの窓豆腐屋さん豆腐屋さん　幽鳳
旅の窓夜霧に濡れた街が見え　默人
秋の窓素晴しき雲見付けたり　桃水
それからは窓にもたれて泣く日あり　柳路
十五六笑へば春の野が廣し　柳翠
笑はれて居るとも知らずしやべつて居　幽鳳
返事する代り白い齒女見せ　默人
挨拶も親しみのある笑ひ　桃水
差し向ひ笑へば笑ふ仲のよさ　柳路
お可笑しさは鼻から飯粒飛んで出た　同
スチールは岸井明の苦笑ひ　同

阪大川柳會（大阪）

九月廿五日　於　會議室
丸島利生報

姑娘、賣藥、洗濯

柳の葉に似て姑娘の瞳は射れり　栞
上海へ行く氣姑娘家出する　春巢
あれ姑娘かと上陸振返り　同
盛場の情緒姑娘軒に立ち　柳秀
姑娘にわけてやさしい部隊長　同
置物にほしい姑娘ものを言ひ　利生
姑娘の耳輪にふれる語らいや　栞
賣藥で結構間に合ふ宣撫班　利生
德用は今切らしてる賣藥屋　春巢
賣藥の瓶を屑屋に笑はれる　同
出戻りが賣藥飲んでゐる噂　方正
買ひにくひ藥へ小僧走らされ　柳秀
性病の藥を賣つて藏が立ち　同
賣藥の嵩手遲れにしてしまひ　同
賣藥にプチ・インテリは頼り過ぎ　春巢
洗濯のきかぬお醜が大臣に入り　筑川
道問へば洗濯急に立ち上り　方正
塀越しに隣の洗濯口をきゝ　一彌
洗濯に物干でする御挨拶　同
桃太郎の話洗濯までねてしまゐ　山彦
奴たこのやうにたつてる洗ひたて　同
上京の母洗濯をして歸り　橙舍
洗濯屋いつもよごれたシャツで來る　同
洗濯をスターは恥じのやうに云ひ　柳秀
洗濯のついでと亭主はづされる　同
萬國旗のやうに乾してる子澤山　青一路
洗濯は誰がするのか赤い爪　同
一徹さ生乾きのまんま穿いて出る　同
洗濯へ歌磨に似て似ぬ脚を出し　栞
洗濯を手傳ふ邪魔も女の子　同
クリーニング屋生垣のとこで又呼ばれ　同
洗濯屋スフの小言を此處も聞き　利生
戀の勝利褌褓洗ふも苦とならず　同
パーマネント歸りや褌褓も洗ふなり　同
洗濯の好きな女房を自慢する　春巢
初年兵洗濯物を持ち歸り　同
洗濯はラヂオをかけて聞いてゐず　同
洗濯の下をくぐつて碁の對手　路郎
主人の留守洗濯をして氣をはらし　同

有恒川柳會（大阪）

九月十九日　寺井鋭々報

老後、馬、風呂敷

皺の數よみ合つてゐるよい老後　至爽瑠
恩給を子に食はれてる老後なり　同
老後にと殘して苦勞させられる　同
叱られて見て老後なり老後なり　同
保險屋が自身老後を考へず　羅漢
世智辛く老後を憩ふ暇もなし　同
非常時に老後預けた社長なり　德二
老後など考へず店は繁昌し　鋭々
老後養ふと云ふその門の大きさよ　同
何々王老後を寧ろ活躍し　同
恩給は有難い、ナアおばあさん　同
老後の樂しみを知らず死んで行き　平三
興がつてゐる贅澤さ馬車にあり　至爽瑠
馬は馬だけの力と言ひたさう　同
慰問品贈れるものなら軍馬にも　羅漢
馬小屋にも出征の旗光り居り　德二
馬も乘つたことあるといふ髯白く　鋭々
乘馬服の娘から戀强られる　同
馬下りた用は煙草を一つ買ひ　同

馬を見る經驗が出來くびとなり　平三
馬の帽子を惡童冠つて見　同
風呂敷は講談本か空の旅　同
兩手に重し風呂敷と子供　同
風呂敷をあけぬ先から栗こぼれ　鋭々
もどされた風呂敷のかさ氣に懸り　至醫瑠
風呂敷が歩いて來たと亭主逃げ　同
風呂敷が行李三つになつて嫁き　同
風呂敷にハンドバッグ包み込み　羅漢
風呂敷包みに女の素性あからさま　路郎
風呂敷のまゝでトマトを呉れてやる　同

川柳はざくら句會（大阪）

八月十二日　於　大阪鐵工所
吉田湊方報

夕月、寶塚、虹、雜吟

夕月へまつすぐ飛んだ赤トンボ　南風
駈落のふたりへ月がまともに來　鈴峯
夕月へ畫像のように女立ち　明美
寶塚男同志がちと淋みし　南風
洋裝の似合ふ娘と來る寶塚　雪舟
寶塚古い人氣の眼とも逢ひ　一房
寶塚奈へぬふたりの手がぬくし　潮花
大陸を大きくまたぐ虹の橋　明美
童心になつて見あげる虹高し　湊万
ハイキング虹を見つけた聲で立ち　美也子
春雷のあとへきれひな虹が立ち　志保
受付の一人は虹を見てゐたり　湊万
銀翼は虹の眞下をくぐりぬけ　明美
幸福を夢見る虹がきれひです　風葉
出かせぎの眦へぽつかり虹が浮き　紫香
大阪の空を繪にして虹は淸え　潮花
ふるさとの見える峠の虹へ立ち　水客
姑娘の胡局へ月がなゝめに來　月都
御無沙汰を暑中見舞に兼ねて書き　湖秋
大陸の土になる氣のおみなへし　秀女
柿實る秋なり去りし君思ふ　翠花
教養もあるに娘は嫁き遲れ　秋子
ジヤンクまで戀の胡弓の音が流れ　潮花

大阪鐵道病院川柳會（太阪）

九月十五日　於　鐵道病院醫局

寢返り、指、食堂車、頭痛、映畫

寢返りを待つて轉寢起される　久枝
手術後の初の寢返りそつとする　皮一
狸寢の辛さ寢返りさへ打てず　骨減
寢返つた譯、三面へミス・ワカナ　桐
寢返りへ蚊やりの煙が少し搖れ　三公
寢返つた顏へまともに蚊帳が來る　柳太
寢返りの臍へ夕陽がまともに來　水虹
氷蟲の音に寢返り目を開き　春巢
子の寢返りのひどい遠雷　某人
寢返りの蚊帳に風あり生家にゐ　同
叩き賣り二貫に負けた指を見せ　野分
指一本足りぬ男のよく稼ぎ　しげを
零落を支へる指が細すぎる　水虹
打診する指の太さを注視する　嘘川
式場はあちらとビラの指がさし　柳太
指の尖までも醉つてる色を見せ　春巢
泣いた指ほぐせば顏は笑つてる　桐
痩せたわと指環のゆるい指を見せ　同
繃帶の指拜むやうに持つてくる　水虹
禮服のカフス釦へ指がじれ　桐
子の指の方へ出て行く春の宵　祖祐
指細く理想主義者と名付けられ　某人
遠慮なくスープが搖れた食堂車　水虹
食堂車大きく搖れて驛に入り　しげを
ビフテキを切る手きまらぬ食堂車　久枝
食堂車スリッパで來る二等客　嘘川
食堂車十年振りの友に會ひ　空頭
食堂車此處もやつぱり混んで居り　三公
停車中覗き込まれた食堂車　春巢
食堂車車掌脫帽して通り　同
陳情の策胸にあり食堂車　某人
頭痛膏貼つた女の世帶じみ　野分
頭痛持ち愛想もなく店にゐる　桐
旅馴れぬ頭痛へ少し窓を開け　嘘川
雨が降るのを言ひ當てた頭痛持ち　春巢
頭痛膏ひとり子に未だ嫁がなし　某人
朝からの頭痛眞夏の雲に捨て　水虹
舞れる間をニュース映畫（よろて）居り　三公
一線ニュース他人事でない泥と見る　某人
戀人に涙見られた映畫館　柳太
校庭の映畫浴衣の糊固し　春巢
脫帽のシーン警官席は留守　同
某奴急に用ある告知燈　桐
映畫今ものうき戀の大寫し　某人
ラヴシーン眞に迫つてカットされ　嘘川
遠慮の兄へ返事を書き濟り　榮花
節入りの返事で銚子持つてくる　鴻了
斷りの返事忘れた頃に着き　冬生
ハイ〳〵で峠の茶屋はお茶を出し　三公
生返事碁は生き死にの關ケ原　しげを
待ち兼ねた色良い返事親が讀み　骨減
返事短く思ひつめたるいぢらしさ　桐
軍事便桑畑から返事がし　某人
返事おし、返事をおしと母は言ふ　皮一
自惚を微塵に碎く返事が來　柳太
送金の事には觸れてゐぬ返事　同
窮屈な目上へ返事出し遲れ　嘘川
曖昧な返事お金が要るのなり　某人
ハイといふ返事の出來た子をほる　三公
オーケーと妹はもう不良じみ　久枝
手を拍てば遠い返事のする舊家　某人
一生に一度の返事日を選び　春巢

雨舟居偶會（島根縣）

九月三日　大國雨舟報

友、ペン、枕

久振り少しは飲ける君を知り　海棠
出世してめつたに會へぬ友を持ち　紅ン坊
インキペンそしてペーパーだけの戀　海棠
生活のそのペン先も疲れきり　雨舟
買ひにくいものの一つに箱枕　海棠

松坂倶樂部句會（大阪）

九月三日　石井白面人報

念佛、持逃げ、橋詰、こほろぎ

念佛の念佛涙で教へられ　美根子
終焉の念佛涙で教へられ　耕二
風が吹いても母念佛を稱へ出し　白面人
念佛の眞似を眼顏で叱るなり　同
念佛でないと覺悟が出來ぬやう　同
しびれ切らして和した念佛　同
持逃げをする顏でなく繩につき　くもを
こいつめが持逃げまでもさせたのさ　美根子
持逃げはされ始末書はとられ　耕二
署からの電話持逃げそれと知り　同
持逃げのついで自轉車乘逃げる　方正
持逃げをせよと手提げのかゝへやう　同
一旗をあげるつもりが持つて逃げ　白面人
留置場で會へば持逃げお辭儀する　同
持逃げへ義理で女給もついて逃げ　同
持逃げはガラスのダイヤの方でした　孤篷
持逃げをして來て見ればおしめだけ　同
持逃げの男に雲は眞白だ　美根子
思ひ出の橋詰に來て立つて見る　耕二
橋詰にまたアドビルが建つうわさ　白面人
橋詰の老舗を聞いて通るなり　方正
橋詰で待つ約束の若さです　同
橋詰で首突込んでゐる屋台　くもを
橋詰で女あつちを向いて待ち　同
橋詰で芭蕉に逢つて四つ渡り　孤篷
橋詰に來て彦九郎下駄をぬぎ　同
廣重は先づ日本橋描いて發ち　同
橋詰で白粉焦けの顏に逢ひ　同
橋詰の餅屋は雲助から知られ　同
待呆けがこほろぎの足もぎつてる　くもを
こほろぎを追はねばならぬ鉢が要る　白面人
お隣りは鈴虫うちはこほろぎか　美根子
こほろぎの伴奏もあるランデブー　同
默つてだまつてこほろぎが鳴いてゐる　耕二
いゝ聲を捕へて見ればこんな虫　同
こほろぎが鳴くかそうかで株の欄　方正
こほろぎに似て墨染の佗しけれ　同
オリオンの星座こほろぎ鳴く地球　孤篷
漫才の席へこほろぎ迷ひ込み　同
こほろぎか猫八輕く鳴いて見せ　同
こほろぎの中で盛遠月を浴び　同

月見、出帆、火鉢、飛行機（九月十七日）

寄りそひし戀は無情と月は云ひ　志村
お月見の居殘り月がもう出掛け　孤篷
月見宴月のあるのを今氣付き　生々庵
子供連れの月見歸らうよ歸らうよ　同
田の中の一軒家なりいゝ月夜　丹路
愛人と來てお月見の群に會ひ　同
退屈な夫婦お月見思ひ立ち　同
月を見る顏はボカンとしてゝよし　同
出帆にそれらしいハンカチを見（そ）　生々庵
情なや君のテープが早く切れ　志村
出帆へどうにもならぬ忘れもの　丹路

見送りもなくて鷗を見る甲板（デッキ）　白面人
一等のキャビン見送り見て歸り　同
魂を持つてかれた樣に船は出る　美根子
出帆のドラはじやけんに叩かれる　同
宇品から出帆したとあつたきり　くもを
出帆の銅羅戀人を泣き止ませ　同
鯨舟臍まで見せて出帆し　同
出帆をまつ間に水のごみが見え　孤蓬
船はいやですねと波止場まだ見てる　同
船長のおひげへ銅羅がなりはじめ　同
老舗料火鉢の艶に割出され　くもを
先生に火鉢があつて話よし　同
變人へとつくに火鉢の火は消えて　丹路
珍客へ火鉢の位置を變へるなり　同
切炭のあかさに見とれ手に見とれ　孤蓬
目錄の火鉢蒔繪の事も添へ　同
固まつた火鉢の灰に秋を知り　生々庵
狼藉を今朝の火鉢が知つてゐる　同
お客まだ來ずに火鉢の火を替へる　白面人
火鉢から鏡へ立つたもの思ひ　同
それからと火鉢おしのけ座をする　美根子
强意見火鉢にかざす手のふるひ　同
歸還せぬ機へ立ちやらぬ部隊長　白面人
人智をこゝに空の巨鯨の金屬美　丹路
旅客機の腹から無事な顔で出る　同
飛び出して見れば飛行機小さいな　くもを
カンカン帽の眞上飛行機見失ひ　同
荒鷲の母なる人の神詣で　美根子
ソレ飛行機が來ましたと散髮屋　同
飛行機の高さへ動く子供の眼　孤蓬
天守閣光り銀翼生きてゐる　同
ダヴインチの憧れ鳥の骨を描く　同
整備兵歸らぬ翼まだ信じ　生々庵
遊覽飛行天下を取つた朗らかさ　同
河豚だけは飛行機だけはで母と住む　同
僚機ともはおゝハンカチを振つて見せ　同
——樫村機を見て——
片翼は大和魂で飛んで見せ　同
全機歸還アナウンサーの聲もよし　同

よつばし川柳會（大阪）

車掌、俄雨　橋本綠雨報

溜り場で女車掌の聲が派手　富士
若夫婦に列車車掌はじやまがられ　秀峰
終點の車掌の顏が雨にぬれ　喜多龜
車掌からうけた親切土產なり　朗舟
終點でキセルで喫ふた老車掌　綠雨
突つ放す樣に車掌はドアをしめ　輝翠
俄雨悲哀を知つた獨り者　草の家
ハンカチを頭にのせる俄雨　飛鶴
俄雨デパートの客急にふえ　靜峯
俄雨思ひが一つ叶ふたり　一志
俄雨干物に妻慌てたり　壽堂
俄雨軒から內はよい話　朗舟
俄雨相合傘に氣がひける　秋意
仇つぽい姿も走る俄雨　旗風
俄雨素足になつた美しさ　翠芳

故郷、父親（九月九日）

故郷のたばこ屋人が變はつてゐ　かほる
ふるさとを知られて言葉はやがわり　溪谷
旅に出てふところさびしさとこいし　勇
故郷の便りあの娘も嫁にゆき　靜峯
としとりて友は故郷の母こいし　吉現
またしても故郷の味思ひだし　聲香
故郷への土產安い物ゑらび　夢想
事毎に故郷を思ひ涙出る　一志
故郷の墓參に涙新なり　壽堂
故郷へ續く濱邊でたゞずみて　飛鶴
本籍を引いて故郷が二つ出來　朗舟
昇進の祝ひに招く國の人　喜多龜
好い月だ雁は故郷の方へ飛び　芳人
父親が汗で働く子ぼんのう　朗舟
父親は叱つておいて釣りに出る　曉童
父親の名前を出して子をおどし　夢想
父親は早く伸びよと肩に載せ　溪谷
今日も又父の歸りが待遠し　喜多龜
ふところの中で父親子をねかし　靜峯
父親は父親らしくはなしかけ　聲香
兩方の手が必要の父になり　芳人

聖花に燦たり
日本精神！
十月一日より十月廿日まで開館
豪華見流し世場面
名物十五段返し
食滿南北先生原案並脚色
菊花に薫る至誠奉公の道
ひらかた大菊人形
ひらかた（西口）下車　急行臨時停車
觀覽料
大人　五十五錢
小兒　二十七錢
現役軍人　半額
傷痍軍人　無料
（徽章佩用者に限る）
連絡割引券發賣
觀覽券付連絡乘車券
大阪より　九十四錢
京都より　一圓十四錢
神戸より　一圓四十七錢
大津より　一圓三十三錢
ひらかた行割引乘車券
大阪より往復　五十錢
京都より〃　七十五錢
京阪電車

記後

★★★★★★★★★★

▼人間位、身勝手な滑稽なものはない。雨が降らねば雨乞ひをする。一滴降つても涙を流してよろこぶ。土砂ぶりに降ると今度は愚痴る、呪ふと云ふ始末だ。ヨーロッパの外交なども、ジッと見てゐれば悲惨な滑稽でしかない。

▼その點、心の一點を趣味に置き、靜かに宇宙に融け込んでゆく人生は幸福だと云はねばならない。思索の秋、句作の秋が來た。私達は趣味陣營の一員たることに、大きな誇りを持つ。

▼柳人渴仰の「武玉川三篇研究」はあと一回で三篇を終ることゝなつた。「武玉川四篇研究」の原稿が既に編輯局の机上に届いてゐることは心强い極みだ。本誌連載の「武玉川研究」を熱讀せずして古川柳を語る勿れである。

▼高尾亮雄氏の「道場生活斷片」は時局下にある我等の生活の無駄を省くためにも體位向上を計るためにも好箇の讀物だ。

▼蛭子省二氏の病間錄「病室手帖」は子規の「病狀六尺」だとも云へる。病闘生活の中にあつて常に筆を絕たない氏の努力を我等は尊くも有難く思ふ。

▼小山文三氏の「隨筆」は我等を微苦笑させずにはおかぬ。小山氏とは誰か。明治時代からの川柳家であるが、所謂川柳家でない川柳家である。時々本誌に句を寄せられるが、その名は當分秘して置かう。

▼斯んな事を書いた次手に「川柳伊豫」に柳大門といふ作家を私の匿名ではなからうかと書いてあつたが、大門氏は阿部閑生氏の會社の社員で俳人としても一家をなしてゐる人である。大門氏が句會に顔出しをしないので火のないとこに煙りが立つたのかも知れない。

▼市塲沒食子君の「僕は大阪人」は近ごろ愉快な文字だ。腹が減つては戰が出來ぬ。戰爭に行つて喰べることばかり云へるやうになれば一人前だ。度胸が出來た証拠だ。

▼一兵卒として出陣してゐる北みきを醫伯から「漫畫陣中鏡」が届いた。流石に――と思はせられる。既に續稿が届いてゐるから期待を乞ふ。

▼逢號發行日を早めてゐるので乘遲れぬやう特に原稿〆切日の嚴守をお願ひする。

（路郎）

募集

第十六卷 第十一號課題

十月十日締切

（十句以内）

夕焼　森東魚選

垢　西いわを選

第十六卷 第十二號課題

十一月十日締切

（十句以内）

番傘　高橋かほる選

別莊　寺井鋭々選

毎號募集

近作柳樽（廿句以内）　麻生路郎選

各地柳壇（會報）

文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

定價

一部　金三十錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

一箇年前金（特輯號共）三圓六十錢

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます御註文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十四年十月一〇日印刷
昭和十四年十月十五日發行

第十六卷　第十號
（毎月一回十五日發行）

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地
編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地（昭和ビル）
川柳雜誌社
電話土佐堀（三三三三）一六三番
（八八一一）六四番
振替大阪七五〇五〇番

廣告料

本誌への廣告に就いては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

禁無斷轉載

新證保有は行行刊の本誌
法律に據る聞紙

寶捌書店

（大阪）參文社　三越書籍部　明文堂　朝日ビル書店
其他市内各書店（東京）東京堂　厳松堂　吉岡書店
玉森堂　紀伊國屋　三味堂（神戸）米田寶文館（函館）
石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

社關係の人々（いろはの順）

主幹

麻生路郎

贊助員

池澤樂居　長谷川一徹　道弘雄　岡本一平　片岡直方　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長岡牛太郎　長野晴濱　藤村作　藤本卯之助　顯原退藏　山本雨迷　浅田一　安川久留美　末弘巖太郎　前田雀郎　前田五健　大西八歩　岩崎柳路　中西おさむ

客員

鳥山一歩　沖野岩三郎　大島濤明　大谷五花村　亀井晟修　笠原春雨　川上三太郎　村花菱　米村あん馬　田村孝之介　谷脇素文　生方敏郎　高尾亮雄　篠田銀波樓　柴谷宰二郎　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　小林不浪人　森東魚　原正　本水客　史風　黒川紫香　丸尾潮花　北山悟郎　水谷鮎美　田鍋夕鐘　姫松夢裡　村岩橋　市岡某　場沒食子　吉田代人　田中崎雨　平佐月　平三　田邊元　井斗翠　由布陽　酒井造　天野藤　居岡至　卜藝　北川春　集

不朽洞會員

橋本綠雨　高橋かほる　福田山雨樓　西田岬樂　永田里十九　奥村丹路　須崎豆秋　春元紀太　妹尾八九滿　橋本波夢　藤岡璑　後藤宵兒　宮岡白峰　石曾根民郎　松下小柳子　西いわを　橋本波夢　藤岡璑

支部と幹事

道頓堀支部（大阪市）　庄萬よし
九三會支部（大阪市）　北山悟郎
函館支部（函館市）　亀井晟修
高知支部（高知市）　國澤春水
梅田支部（大阪市）　水谷鮎美
籔川支部（島根縣）　尼綠之助
鳥取支部（鳥取市）　中島鐵州
松山支部（松山市）　矢野虻之麿
天王寺支部（大阪市）　妹尾八九滿
鶴町支部（大阪市）　岩橋双虎
御池橋支部（大阪市）　西いわを
松江支部（松江市）　勝谷山川兒
大鐵局支部（大阪市）　正本水客
西條支部（愛媛縣）　荒井英賀夫
今里支部（大阪市）　市塲沒食子
今治支部（今治市）　長野文庫
光笑會（大阪市）　永田里十九
竹原支部（廣島縣）　黒本芳泉
十三支部（大阪市）　淺野牧人
兵庫支部（神戸市）　三崎陽幸
廣島支部（廣島市）　濱田久米雄
名古屋支部（名古屋市）　吉田水車
北大阪支部（豐中市）　黒川紫香
港支部（大阪市）　多田一波
下關支部（下關市）　多田市多樓
北鮮支部（清津府）　三鴨美笑
蒙疆支部（張家口）　岩崎柳路
上海支部（中華）　植山九天

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）
昭和十四年十月十日印刷納本　昭和十四年十月十五日發行

川柳雜誌

NO・189

定價金30錢　送料壹錢

髮の美は
げに日本の
姿なり

フケ・カユミを止め白髮・若禿を防ぎ明朗な壽年美を創る

伊豆椿ポマード

伊豆椿香油本舗

大槻彩芳園

のために

妊娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

ワダカルシューム錠

大阪道修町　和田卯助商店

「安産のために」冊子呈上

櫻林醫學博士
片瀨醫學博士　推奬監査